

昼久保Ⅴ遺跡

一般国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査報告書

2008. 3

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
盛岡市教育委員会

昼久保 V 遺跡

一般国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査報告書

2008. 3

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
盛岡市教育委員会

序

平成18年1月、盛岡市と玉山村の市村合併により、新しい盛岡市が誕生しました。これにより玉山村に所在する多くの遺跡も盛岡市に仲間入りし、盛岡市の埋蔵文化財行政は、新しい時代を迎えることになりました。

盛岡市には、国指定史跡 志波城跡、盛岡城跡をはじめとして数多くの遺跡が存在します。これら先人の残した文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、私たち現代人に課せられた重大な責務であります。しかし同時に、地域開発と埋蔵文化財保護との調和のとれた施策の確立は、今日的な課題となっております。発掘調査により、貴重な遺跡が湮滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面、先人たちの生活や文化を明らかにできることも事実です。

本報告書は、国道4号線渋民バイパス建設事業に伴い、平成17年から18年にかけて発掘調査した昼久保V遺跡の調査結果をまとめたものです。遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡をはじめとする遺構や遺物が発見されました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となることを切に希望します。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成にあたり多大なご協力とご指導を頂きました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、岩手県教育委員会をはじめ、関係機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成20年3月

盛岡市教育委員会

教育長 八巻 恒雄

例 言

1. 本書は、岩手県盛岡市玉山区芋田字武道地内に所在する昼久保V遺跡の発掘調査報告である。
2. 本調査は、国道4号線渋民バイパス建設事業に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 平成18年1月、盛岡市と玉山村の市村合併により、新しい盛岡市が誕生した。両市村の合併協議により、本調査に係る業務は新しい盛岡市が担当することとなった。
4. 発掘調査は、第1次調査を玉山村教育委員会（当時）が、第2次調査及び整理業務を盛岡市教育委員会が実施した。調査期間は下記の通りである。

第1次調査 平成17年8月17日～11月21日 調査面積 6,540m²

第2次調査 平成18年7月11日～10月18日 調査面積 7,615m²

5. 発掘調査及び本書の編集・執筆は、盛岡市教育委員会 遺跡の学び館 菊地幸裕が行った。
6. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系（世界測地系座標）を座標変換した調査座標で表示した。

調査座標原点 R X ± 0 X -15,300.000m

R Y ± 0 Y +29,500.000m

7. 挿図中の高さは、標高値をそのまま使用している。
8. 挿図中の土層図は、堆積の仕方を重視し、線の太さを使い分けた。土層註記は、層理ごとに本文で記述し、個々の層位については、割愛した。

なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』（1998 小山・竹原）を参考にした。

9. 遺構記号は下記のとおりである。

遺構種別	記号	遺構種別	記号	遺構種別	記号
竪穴住居跡	RA	土坑	RD	溝	RG
建物跡	RB	竪穴	RE	配石・集石	RH
柱列跡	RC	焼土	RF	古墳	RX

10. 本書中の地図は、『玉山村管内図』（国土地理院作成図複製）及び『盛岡市都市計画整備図』（平成元年）を使用した。

11. 本調査に係り、調査業務の一部を下記業者に委託した。

航空写真撮影・基準点測量 朝日航洋株式会社

石器実測 株式会社 ラング

12. 発掘調査及び本書の編集にあたって、下記の方々から有益なご助言、ご指導及びご協力を賜った。

記して謝意を表する次第である。（順不同・敬称略）

嶋 千秋 熊谷 常正 菅 常久 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

13. 本調査に関する出土遺物及び記録類は、盛岡市遺跡の学び館で保管・管理している。

14. 調査体制

《～平成18年1月》

〔調査主体〕	玉山村教育委員会	教育長	川崎 稔
〔調査総括〕	社会教育課	課長	高田 秀雄
		主任主査	櫻庭 直樹
〔調査担当〕		主査	菊地 幸裕

《平成18年1月～》

〔調査主体〕	盛岡市教育委員会	教育長	八巻 恒雄
〔調査総括〕	遺跡の学び館		
	館長	三浦 晃（～平成19年3月）	武石 幸久（平成19年4月～）
	館長補佐	佐藤 和男	
〔調査〕	文化財主査	室野 秀文	
	文化財主査	菊地 幸裕（本調査担当）	
	文化財主任	三浦 陽一（～平成18年3月）	神原 雄一郎（平成18年4月～）
	文化財主事	今野 公顕 佐々木 亮二	
	文化財調査員	齋藤麻紀子（～平成18年3月）	松川 光海（～平成19年3月）
		鈴木 賢治（平成18年4月～）	浅沼 のぞみ（平成19年4月～）

《発掘調査・整理作業》

荒澤 信子 泉山 紀代子 伊藤 喜代子 伊藤 光子 遠藤 なえ子 及川 京子
大川 仁美 大場 聡美 小澤 久美子 加藤 久栄 金澤 京子 嘉糠 和男
川上 昌子 川村 久美子 熊谷 正男 小綿 洋子 佐々木 逸人 佐々木 由子
佐藤 和子 澤田 岩男 重森 直人 高橋 ヨシ 竹田 ヨシエ 竹花 栄子
千葉 留里子 日野杉 節子 福田 香乃 武蔵 真由実 村山 伊津子 村山 雅裕
門田 有紀

目 次

序

例 言

目 次

I 遺跡の環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 地形及び地質	1
3. 周辺の遺跡	1
II 調査経過	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査方法	3
III 遺構と遺物	7
1. 縄文時代の遺構と遺物	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) 土坑	11
2. 遺物包含層	28
(1) 層相	28
(2) 出土遺物	30
3. まとめ	48

挿 図 目 次

第1図 本遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 調査区全体図	4
第3図 遺構全体図	5
第4図 RA01住居跡	7
第5図 RA02住居跡	8
第6図 住居跡出土遺物（土器）	9
第7図 RA01住居跡出土遺物（石器）	10
第8図 RD01・03・19・20・30・31土坑	12
第9図 RD02・04・05・06・07・08・09・10・11・12・13・14土坑	13
第10図 RD15・16・17・18・21・22・23・24・25・26・27土坑	16
第11図 RD28・29・34・39・40・41土坑	20
第12図 RD32・33・35・36・37・38土坑	23
第13図 土坑出土遺物（土器）	25
第14図 ピット群	27

第15図	遺物包含層	28
第16図	北西部包含層 グリッド別土器出土量	29
第17図	北西部包含層出土遺物(土器) I	31
第18図	北西部包含層出土遺物(土器) II	32
第19図	北西部包含層出土遺物(土器) III	33
第20図	南西部包含層出土遺物(土器) I	35
第21図	南西部包含層出土遺物(土器) II	36
第22図	南西部包含層出土遺物(土器) III	37
第23図	南西部包含層出土遺物(土器) IV	38
第24図	遺物包含層出土遺物(石器) I	40
第25図	遺物包含層出土遺物(石器) II	41
第26図	遺物包含層出土遺物(石器) III	42
第27図	遺物包含層出土遺物(石器) IV	43
第28図	遺物包含層出土遺物(石器) V	44
第29図	遺物包含層出土遺物(石器) VI	45
第30図	遺物包含層出土遺物(石器) VII	46
第31図	遺物包含層出土遺物(石器) VIII	47

写真図版目次

写真図版 1	遺跡全体写真	50
写真図版 2	R A 01・02住居跡 I	51
写真図版 3	R A 01・02住居跡 II	52
写真図版 4	R D 01・03・07・19・20・30・31土坑	53
写真図版 5	R D 32・33・34・35・37・40土坑	54
写真図版 6	北西部包含層出土土器	55
写真図版 7	南西部包含層出土土器	56
写真図版 8	遺物包含層出土石器	57

I 遺跡の環境

1. 遺跡の位置

岩手県盛岡市は、県土のほぼ中央に位置する。北に岩手町・葛巻町、東は岩泉町・川井村、西は八幡平市・滝沢村・雫石町、南は矢巾町・紫波町・花巻市と接している。岩手県の県都として人口約30万人、総面積は約886.5km²を測る。昼久保V遺跡は、当市北部の玉山区（旧 玉山村）南西部、I G Rいわて銀河鉄道線洪民駅から北東約4.0kmの地点に位置している。旧 玉山村は、歌人石川啄木の故郷として著名な地であり、総面積は約398km²、村域の約80%は山林が占めている。平成18年1月の盛岡市との市村合併により盛岡市へ編入され、地域自治条例により玉山区となった。

2. 地形及び地質

盛岡市玉山区は、その多くを山間部が占めている。東側には北上山系の山々が連なり、西側には本県最高峰の岩手山をはじめとする奥羽山系を望む。区内のほぼ中央には秀峰 姫神山が聳えている。

玉山区西部には、東北地方最大河である北上川が南北に流れている。これに、東から丹藤川、西から松川、生出川などが合流している。

本遺跡周辺は、起伏量100～200m程度の小起伏山地で占められている。粘板岩、チャート、花崗岩等で形成された北上山系の西縁部にあたり、さらに西側には、北上川岸の氾濫源及び低位段丘となる。北上川西岸には、凝灰質のシルト～砂層を主体に構成された好摩段丘が広がっている。

3. 周辺の遺跡

盛岡市には、旧石器時代から近世までの約750遺跡が所在している。このうち、玉山区には220余りが分布している。

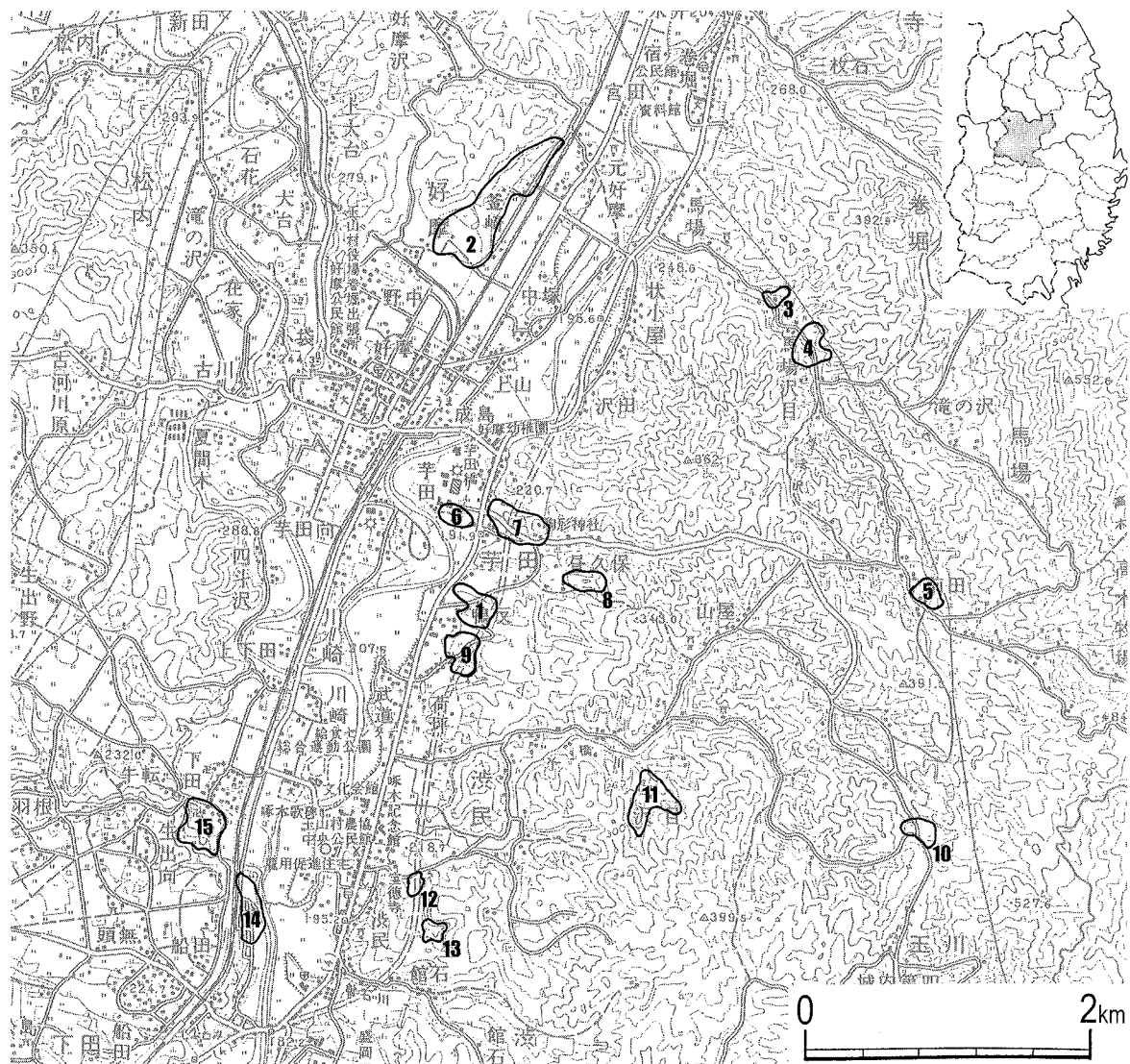
当市において最も古い遺跡は、玉山区藪川に所在する小石川遺跡である。約13,000年前の旧石器時代後期に比定されるもので、在地性の頁岩・チャート、非在地性の黒曜石等を材料とした石器が確認されている。縄文時代の遺跡としては、縄文時代早・後期の土器・土製品が出土した日戸遺跡、縄文時代晩期初頭の竪穴住居跡が確認された前田遺跡、晩期中葉を主体とする遺物が多量に出土した宇登遺跡などが認められる。

本遺跡周辺においては、国道4号線東側を主体に遺跡が分布している。分けても縄文時代の遺跡が顕著であるが、そのほとんどは発掘調査が未実施のため詳細は判然としない。

縄文時代以外の遺跡では、奈良・平安時代の遺跡が多く認められる。本遺跡北方約3.3km、I G Rいわて銀河鉄道線好摩駅北方には釜崎遺跡が所在する。昭和48（1973）年、岩手大学の草間俊一を団長として発掘調査が行われ、8世紀に帰属する竪穴住居跡及び土師器が検出された。当該調査は学術調査のため、調査した遺構数は僅少であるが、現地踏査の結果、数十棟以上の竪穴住居跡が群在する集落跡と想定されている。

本遺跡の北方約0.7kmには芋田Ⅱ遺跡が位置している。平成10・15（1998・2003）年に(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、平安時代の竪穴住居跡をはじめとする遺構、土師器・須恵器・鉄製品等の遺物が確認された。当該遺跡からは、土師器の耳皿や墨書土器等も出土しており、遺跡の性格を考察するうえで重要な資料となっている。

また、北東約3.1kmに所在する芦名沢Ⅰ遺跡では、縄文時代後期を主体とする竪穴住居跡、縄文土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器、鉄製品などが確認されている。かかる調査成果は、当該地域における古代文化相の解明にとって重要な資料となるとともに、当市南域に所在する志波城跡をはじめとする古代の遺跡を考察する上においても、新たな知見を与えるものと期待される。



1	昼久保Ⅴ遺跡	2	釜崎遺跡	3	芦名沢Ⅰ遺跡	4	芦名沢Ⅳ遺跡	5	前田Ⅰ遺跡
6	下芋田遺跡	7	芋田Ⅱ遺跡	8	昼久保Ⅰ遺跡	9	武道Ⅳ遺跡	10	田の沢Ⅳ遺跡
11	山屋開墾遺跡	12	小長根Ⅱ遺跡	13	長渡遺跡	14	下田八幡館跡	15	下田館跡

第1図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ 調査経過

1. 調査に至る経緯

昼久保Ⅴ遺跡は、国道4号線渋民バイパス建設工事に係り、当該事業区域内に所在することから、記録保存を目的とする発掘調査を実施することになったものである。

当該事業区域に所在する埋蔵文化財包蔵地は、岩手県教育委員会（以下、「県教委」という。）発刊の『岩手県遺跡地図』に掲載されている。このため、当該事業主体である国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所（以下、「国道事務所」という。）では県教委に試掘調査を依頼し、県教委では、適時調査を行った。本遺跡についても同様に、試掘調査によって事業区域内に埋蔵文化財が確認され、県教委ではその結果を国道事務所に回答した。

回答を受けた国道事務所と県教委は協議を行い、発掘調査を行うこととした。調査の委託先については、県教委、国道事務所及び玉山村教育委員会（当時）の三者で協議した結果、玉山村教育委員会が発掘調査を受託することになった。

調査は、工事計画に基づき、平成17・18年の2ヵ年で実施することになり、第1次調査を平成17年8月17日から同年11月21日まで行った。

これと時期を同じくし、玉山村と盛岡市は合併に向けた合併協議会を立ち上げ、事務調整を行っていた。本調査については、新市に引き継がれることとなり、盛岡市教育委員会事務局文化課（現 歴史文化課）が事務調整を、遺跡の学び館が発掘調査を担当することになった。

かかる協議に基づき、第2次調査は盛岡市教育委員会が調査主体となり、盛岡市遺跡の学び館が担当した。調査は平成18年7月11日から同年10月18日まで行い、その後、整理作業及び報告書作成業務を行った。

2. 調査方法

本調査は、事業区域を十字に通る農道を境とし、第1次調査では北西・北東部を、第2次調査では南西・南東部を対象とした。調査対象面積は、第1次が6,540㎡、第2次が7,615㎡である。

調査にあたり、調査区域全面にグリッドを設定した。グリッドは平面直角座標 X 系の X Y 両軸に沿い、区域全域を網羅するよう、100mを単位とした大グリッドを設定した。さらに、大グリッドを4m四方のグリッドで25×25に分割し、設定した。グリッドは、南北軸上を100mごとにアルファベット大文字、さらに細分割した4mごとにアルファベット小文字を、東西軸上を100mごとにローマ数字、4mごとにアラビア数字を付し、両者を組み合わせて、A I a 1、B II b 2、と呼称していった。

調査は、表土の除去から開始した。表土除去にあたっては、起重機を使用した。表土除去後、遺構検出を行った。その結果、調査区東側の区域においては遺構密度が低く、西側の密度が高いことが取られた。

引き続き、遺構精査に移った。検出遺構は全て半截し、基底面まで掘り下げた後、土層の堆積状況を実測図及び写真で記録し、完掘した。完掘後、平面図の実測及び完掘状況の写真を撮影した。

検出遺構は、任意の順序で精査してゆき、調査順に遺構名を付した。遺構名は、遺構種別ごとに予め設定した記号とアラビア数字を組み合わせて冠し、呼称した。精査の過程で検出した遺物は、遺構名及び出土層位を記録

して収納した。

調査区東側区域のうち、北端部分は、事前の試掘調査等により、遺構分布が極めて希薄であることが判明していたので、全体の表土除去は行わず、トレンチにより遺構の分布状況を確認し、適宜拡張することとした。トレンチ調査の結果、重複した陥し穴状土坑が2基検出されたので、これが箇所を拡張し精査した。

調査区東側区域の調査終了後、西側区域の調査に移行した。当該区域も、同様の方法で調査を行い、全ての遺構の精査終了後、調査区全体の地形測量及び航空写真撮影を行い、当該調査を終了した。

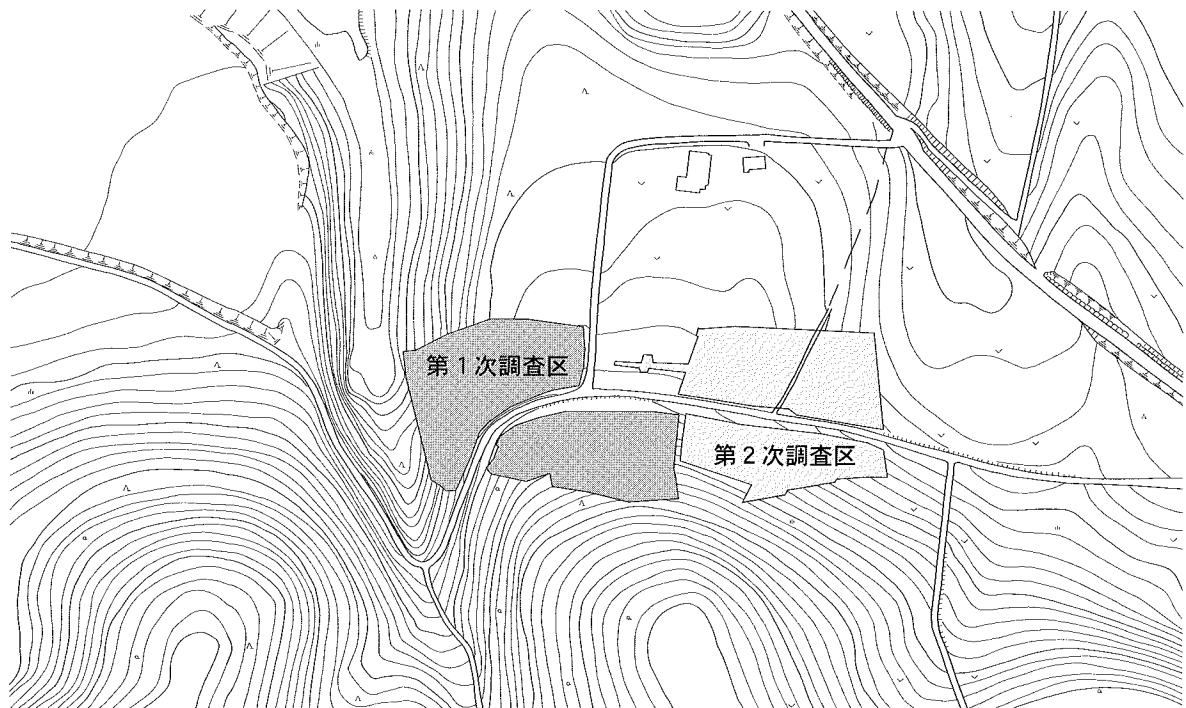
翌年度の第2次調査は、第1次調査の南側区域を調査対象とした。ここにおいても、上述した第1次調査と同様の方法で調査を行った。

第2次調査区域は、北側区域が尾根中腹の平坦面で、ここより南方向へ斜面を形成し、南端部が谷底となる地形を呈していた。遺構は北側平坦面で顕著に認められ、南側の斜面部分においては、ほとんど検出されなかった。遺構精査は、東側区域から着手し、漸次、西側区域に移行した。

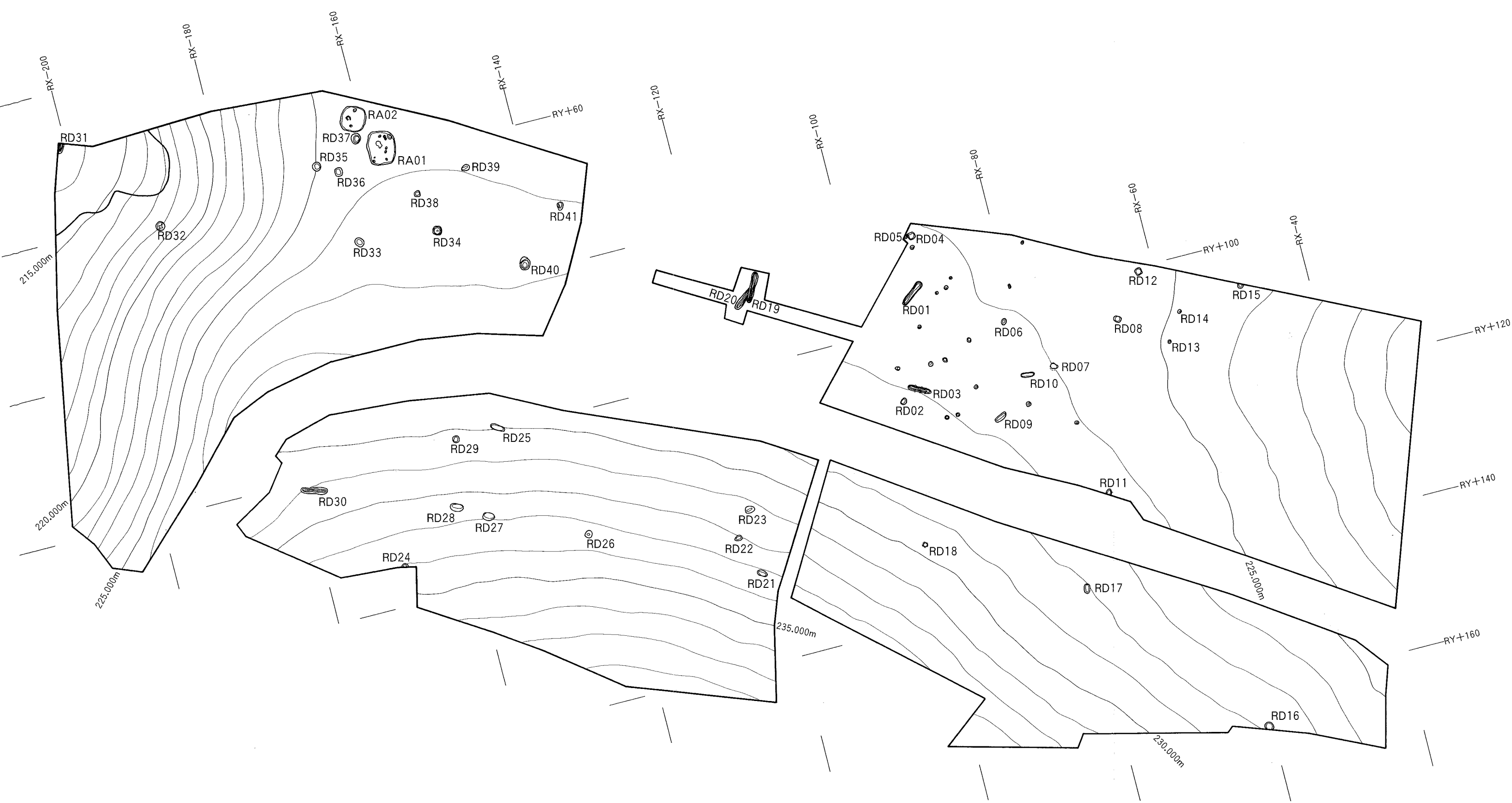
西側区域では、南端部の谷底で遺物包含層が確認された。遺物包含層の調査は、土層観察用の畦（ベルト）を設定し、層の堆積状況及び面的広がりを見ながら掘り下げた。出土した遺物は、グリットを4分割した2m四方の小グリットを単位として、層位別に取り上げた。詳細については後述するが、これが包含層からは縄文時代早期から晩期までの土器を主体とした遺物が確認された。

これが後、北側区域の遺構精査に移行し、竪穴住居跡及び土坑が確認された。上述のとおり、谷底の遺物包含層において縄文時代早期及び前期の遺物が確認されているため、高位に立地する北側区域から当該期の遺構が想定されたが、精査の結果、明確に当該時期に帰属する遺構は確認されなかった。そのため、さらに掘り下げて遺構の検出を行ったが、結局、検出には至らなかった。

全ての遺構の調査終了後、第1次調査同様に、地形測量及び航空写真撮影を行い、当該調査を終了した。



第2図 調査区全体図 (S=1/3,000)



第3図 遺構全体図 (S = 1 / 500)

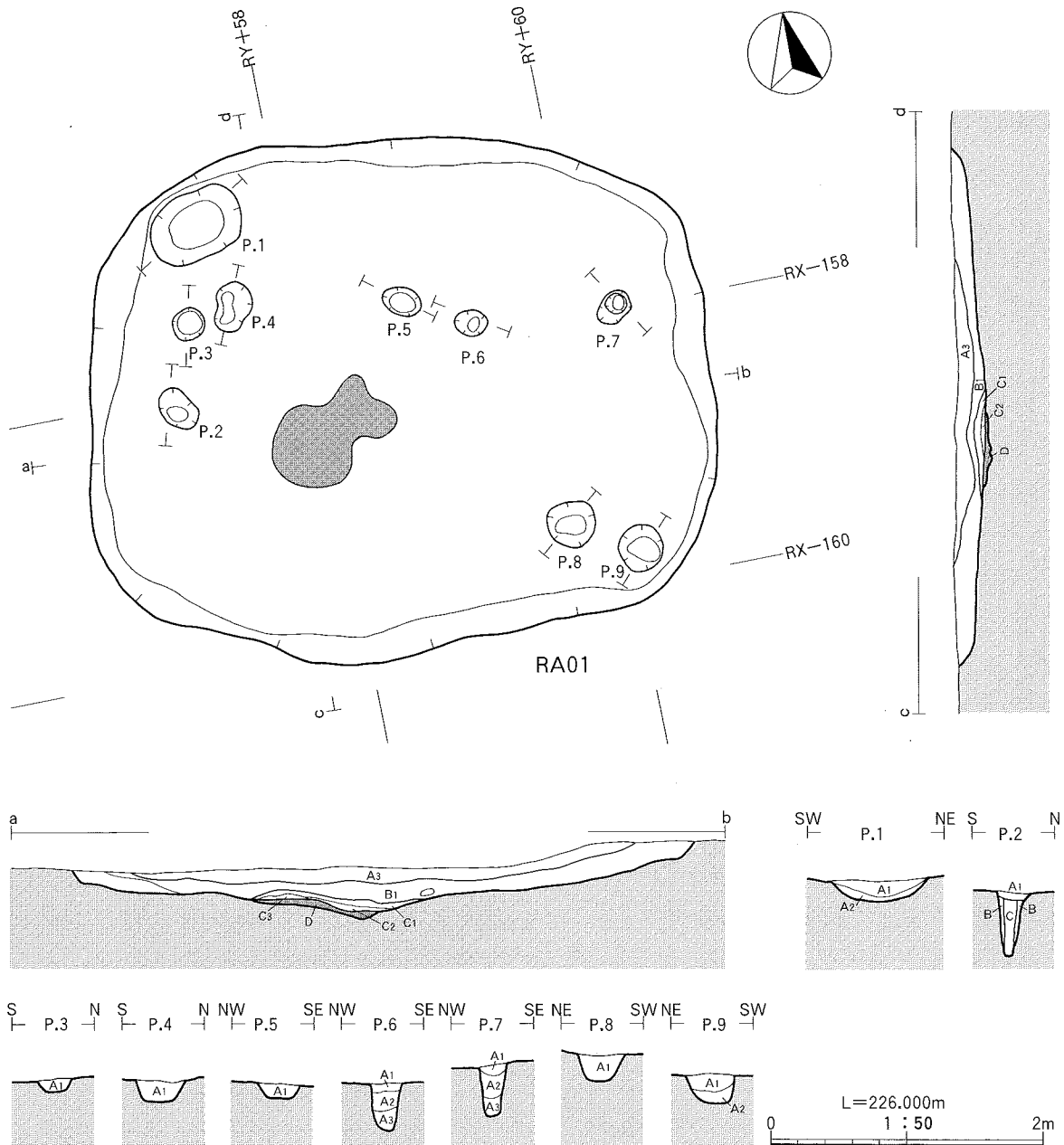
Ⅲ 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

RA01住居跡 (第4・6・7図)

位置 B I h 9 南東隅～B I i 10 平面形 不整隅丸方形
 規模 長軸上端約4.5m・下端4.3m、短軸上端約3.7m・下端3.3m、壁高約0.6m



第4図 RA01住居跡

掘込面 削平 検出面 IV層上面

埋土 自然堆積による。A・B・C層に大別され、A層は3層、B層は2層に細別される。
 A層—黒褐色土を主体とし、褐色土及びスコリア粒を若干含む層である。
 B層—黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒を含む層である。
 C層—暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒が多量に含まれる層である。

炉の状態 地床炉。住居内中央部からやや南西寄りの地点で検出された。瓢形のような不整形を呈し、規模は、長軸約1.0m、短軸約0.4mを測る。火床面の被熱は弱く、土質は軟質であった。

壁の状態 直立気味に外傾して立ち上がる。 床面の状態 凸レンズ状に彎曲する。

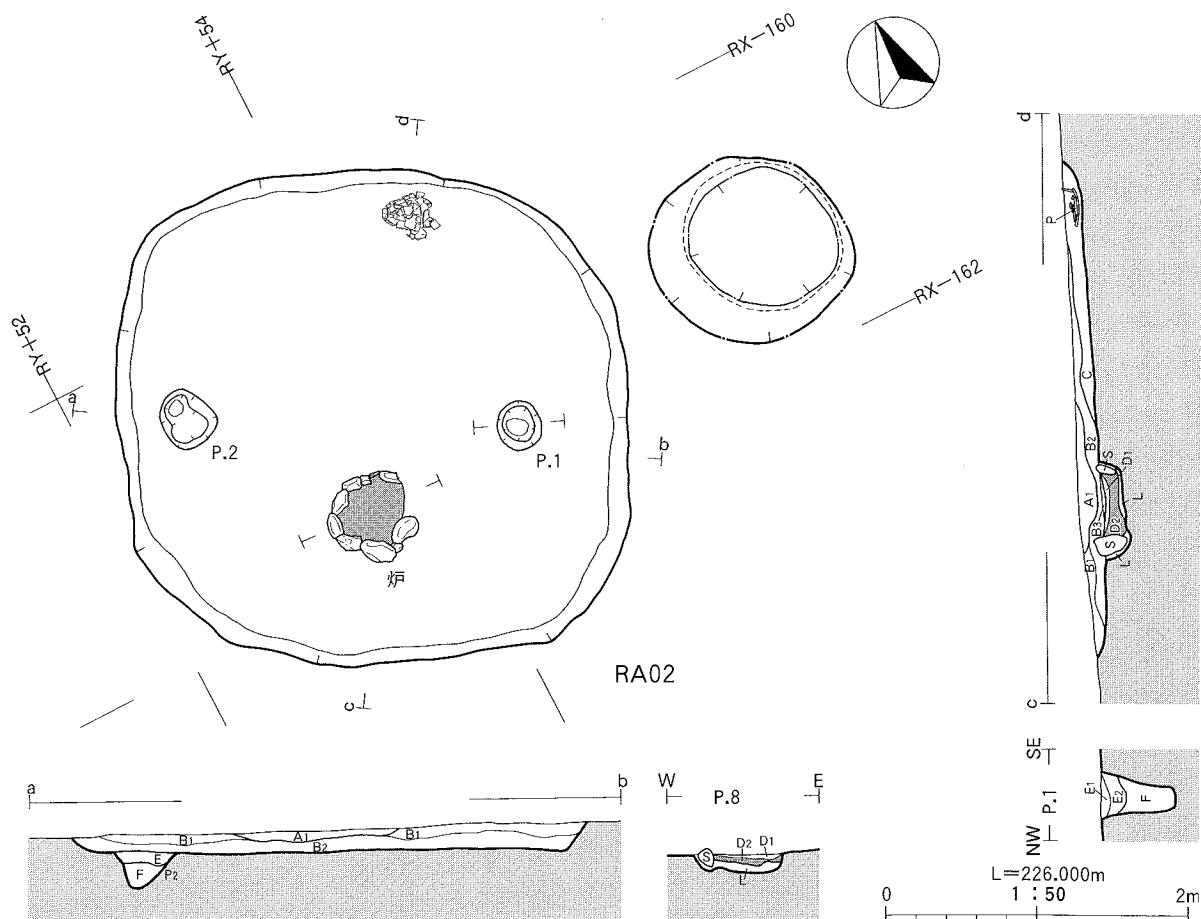
土坑 北西部隅において、不整楕円形を呈する住居内土坑（P1）が検出された。基底面から緩やかに彎曲して立ち上がる形態を呈し、規模は、長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.15mを測る。

柱穴 8口検出された。いずれも平面は不整円形を呈し、規模は径約0.2m～0.4m、深さ約0.1m～0.5mを測る。

出土遺物 縄文時代早期から中期の土器、フレーク等が出土した。ほとんどがA層及びB層上層から出土している。1は沈線と貝殻腹縁文によって幾何学文様が描かれている。4は胴部下部に絡条体が認められる。

R A02住居跡（第5・6図）

位置 B I i 8南東部～B I j 9北西部 平面形 不整隅丸方形



第5図 R A02住居跡

規 模 長軸上端約3.4m・下端約3.2m、短軸上端約3.3m・下端約3.1m、壁高約0.3m

掘 込 面 削 平 検 出 面 IV層上面

埋 土 自然堆積による。A・B・C層に大別され、B層は3層に細別される。

A層－ブロック状の黄褐色土と暗褐色土が混在する層である。

B層－黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、黄褐色土粒を含む層である。

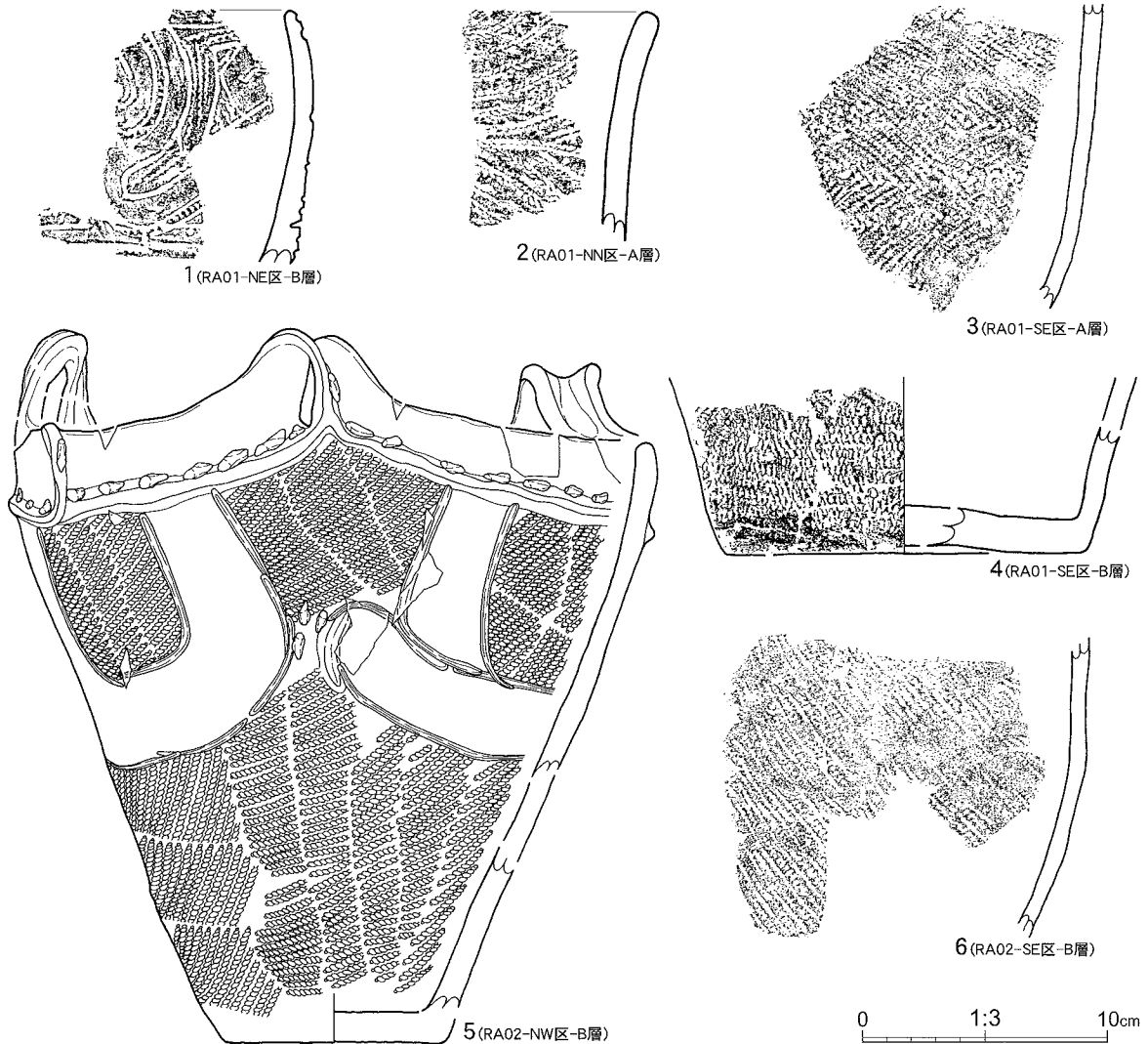
C層－黒褐色土を主体とし、黒褐色土粒、黄褐色土粒を含む層である。炭化物も含まれていた。

炉の状態 石囲炉。住居跡中央からやや南寄りの床面で検出された。規模は、径約0.6mを測る。10～20cm程度の石が取り囲むように配置され、東部が開いていた。被熱面は炉内全面にわたり、北側にある石の内側も被熱が認められた。

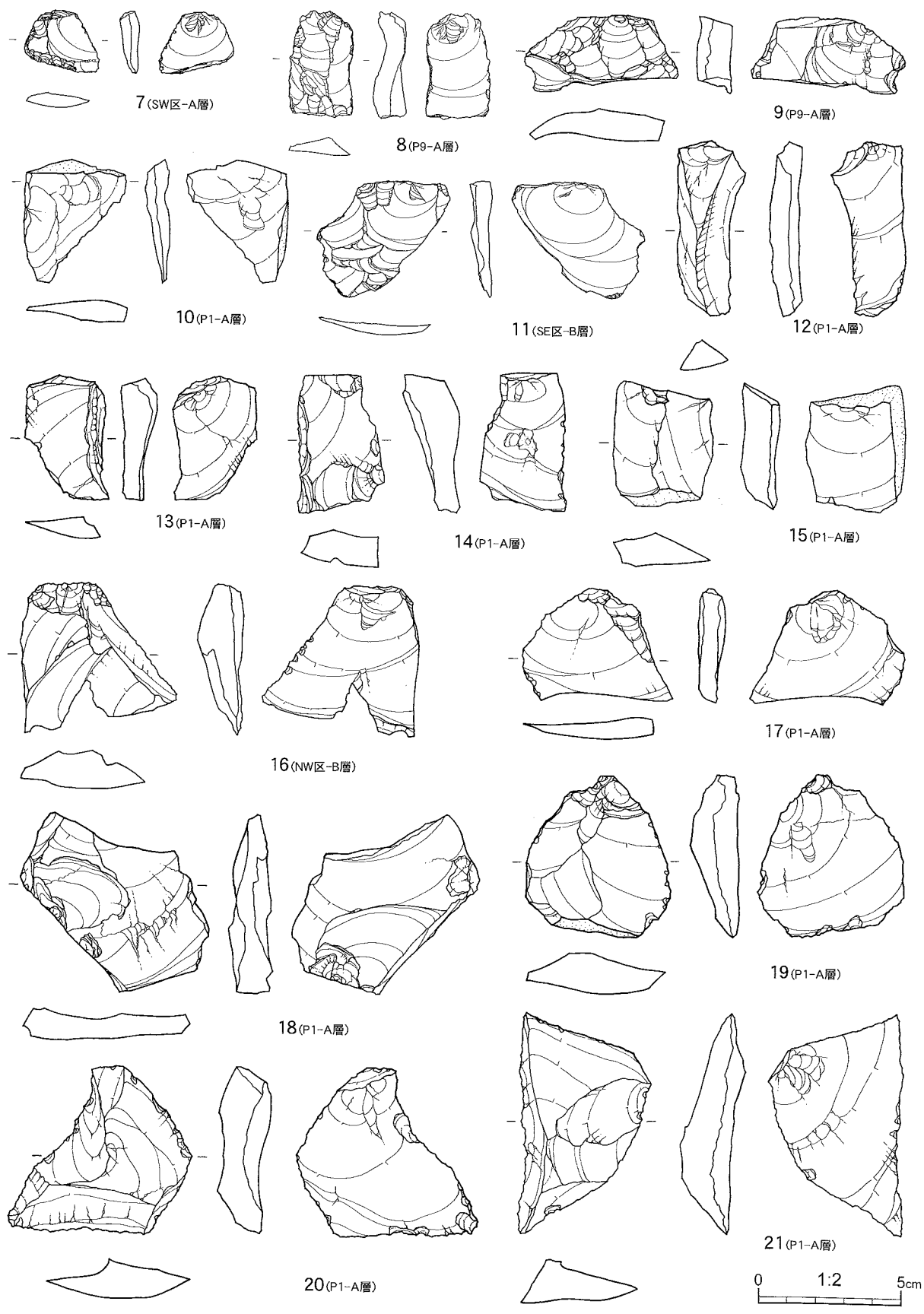
壁の状態 緩やかに内彎しながら外傾して立ち上がる。 床面の状態 ほぼ平坦

柱 穴 2口検出された。P1は東壁よりやや内側寄りの地点で、P2は西壁に近い位置で検出された。両者ともに不整形円形を呈し、規模は径約0.4m、深さ約0.5mを測る。

出土遺物 縄文時代中期の深鉢（5）が出土した。出土位置は住居跡北側のC層内で、床面より僅かに高い位置から、横倒し、圧潰された状態で検出された。



第6図 住居跡出土遺物（土器）



第7図 R A01住居跡出土遺物 (石器)

(2) 土 坑

R D01土坑 (第8図)

位 置	A I q 19南東部～A I r 20北西部	平 面 形	溝状の長楕円形
規 模	長軸上端約3.8m・下端約2.9m、短軸上端約0.8m・下端約0.4m、深さ約1.1m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	自然堆積による。A・B層に大別され、それぞれ3層に細別される。 A層－黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、褐色土粒が混入していた。 B層－黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、褐色土粒、黄褐色土粒が混入していた。最下層B3層では、黄褐色土粒が多量に認められた。		
壁の状態	外傾して立ち上がり、壁上位は括れを有してさらに外傾する。		
出土遺物	なし		

R D02土坑 (第9図)

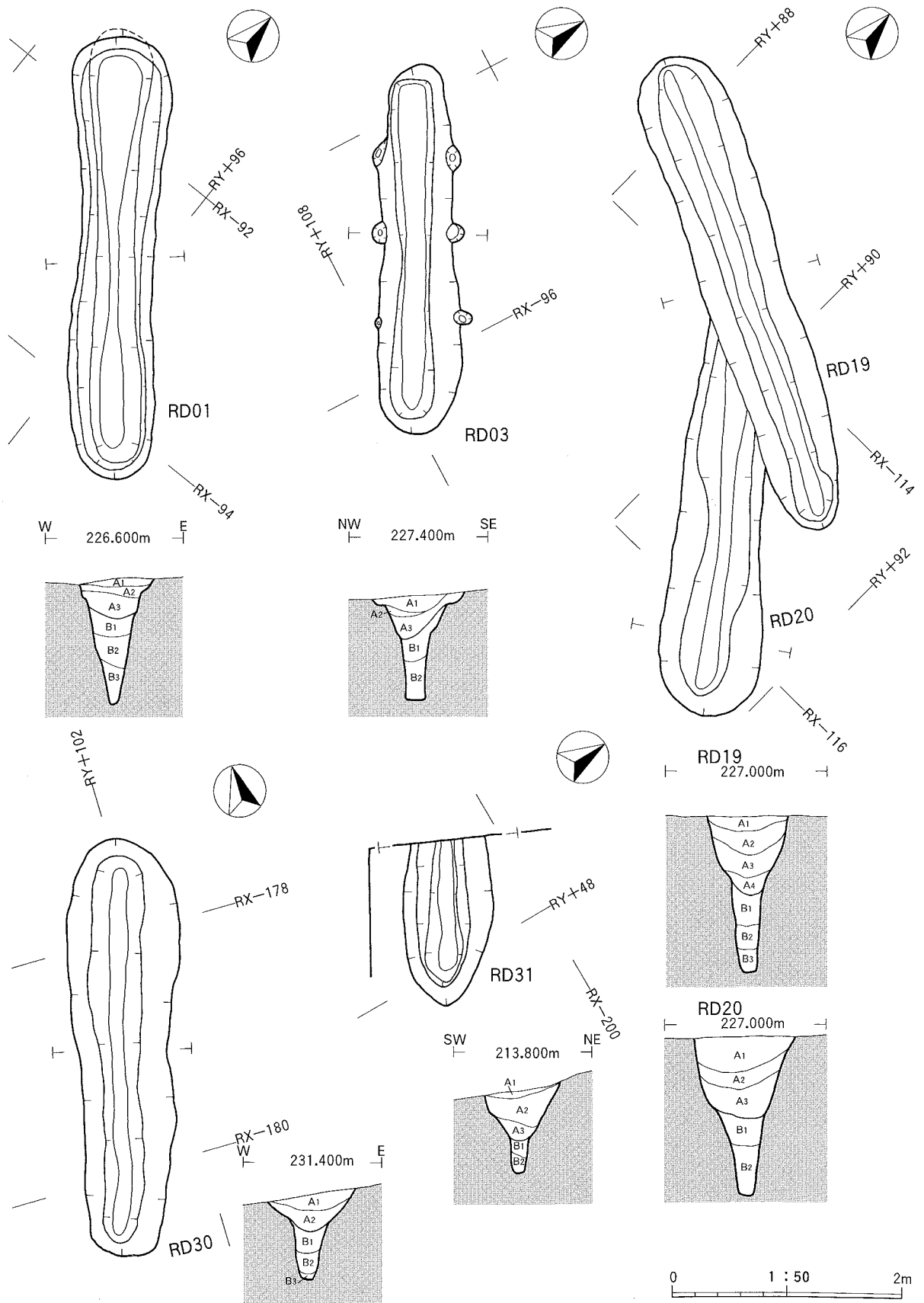
位 置	A I s 23北部	平 面 形	不整円形
規 模	上端約0.9m・下端約0.7m、深さ約0.3m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒を含むA層よりなる。		
壁の状態	外傾して立ちががる。		
出土遺物	なし		

R D03土坑 (第8図)

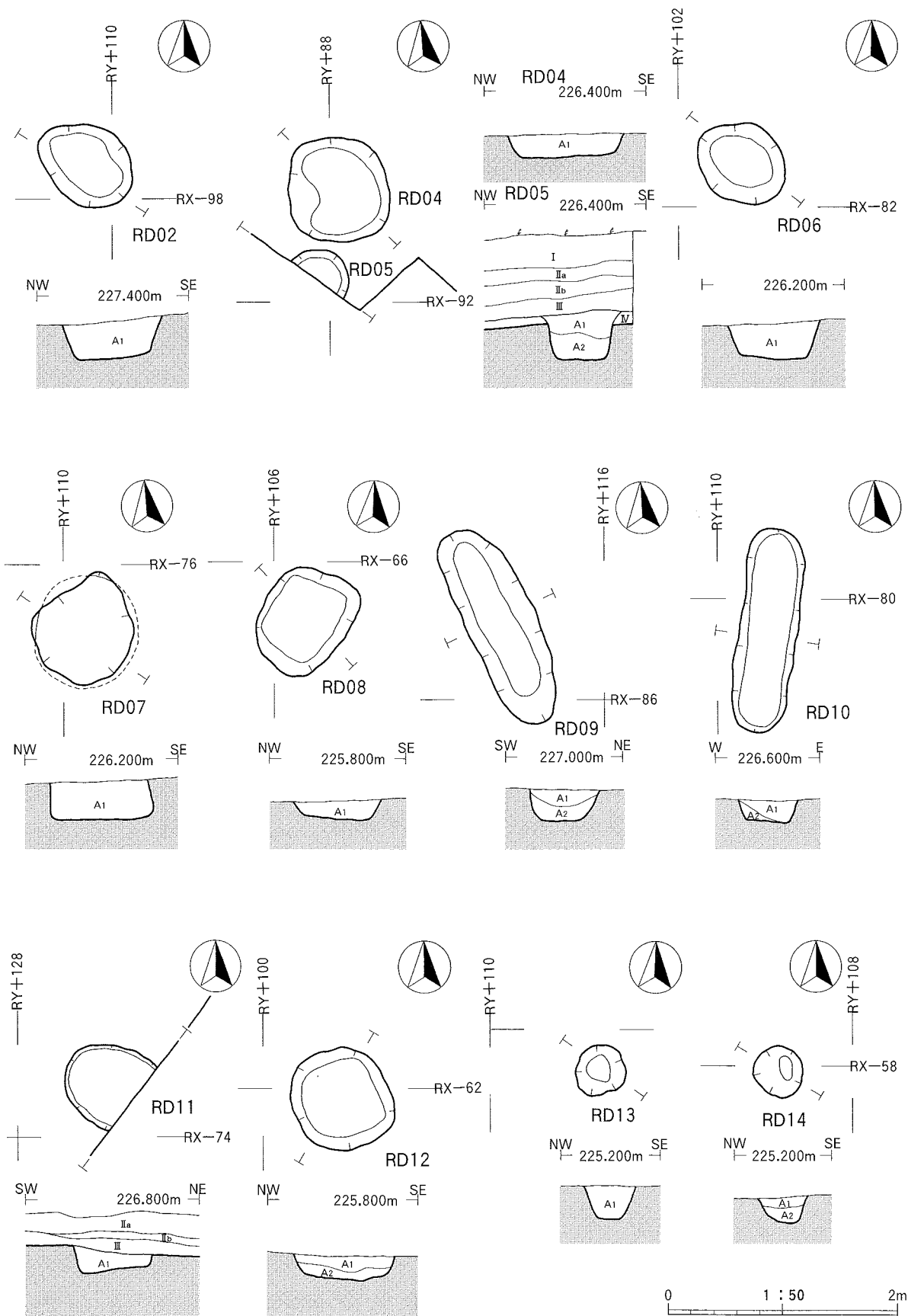
位 置	A I r 23西部	平 面 形	溝状の長楕円形
規 模	長軸上端約3.2m・下端約2.8m、短軸上端約0.8m・下端約0.3m、深さ約0.9m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	自然堆積による。A・B層に大別され、A層は3層、B層は2層に細別される。 A層－黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒を含む層である。 B層－黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、黄褐色土粒が混入している層である。		
壁の状態	基底面から僅かに外反しながら外傾して立ち上がり、壁上位はさらに外傾する。 開口部長手部分において、径10cm程度の小ピットが6口、対となって検出された。埋土の堆積状態から、本土坑に帰属するものと判断したが、性格等については明確にしえない。		
出土遺物	なし		

R D04土坑 (第9図)

位 置	A I q 18西部	平 面 形	不整円形
規 模	上端約1.0m・下端約0.8m、深さ約0.2m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒を含むA層からなる。		
壁の状態	基底部より外傾して立ち上がる。		



第8图 RD01·03·19·20·30·31土坑



第9图 RD02·04·05·06·07·08·09·10·11·12·13·14土坑

出土遺物 なし

R D05土坑 (第9図)

位 置 A I q17東部。一部調査区外に延びる。 平面形 不整円形
規 模 上端約0.6m・下端約0.4m、深さ約0.4m
掘込面 IV層上面 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入するA層からなる。A層はさらに2層に細別される。
壁の状態 基底面より外傾して立ち上がる。壁上位、開口部近くは、僅かに外反している。
出土遺物 なし

R D06土坑 (第9図)

位 置 A I o21北部 平面形 不整円形
規 模 上端約0.8m・下端約0.6m、深さ約0.3m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入するA層からなる。
壁の状態 基底面より外傾して立ち上がる。
出土遺物 なし

R D07土坑 (第9図)

位 置 A I m23南部 平面形 不整円形
規 模 上端約0.9m・下端約1.0m、深さ約0.3m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入するA層からなる。
壁の状態 僅かに内傾して立ち上がる。概ね開口部径が基底部径より小さく、フラスコ形を呈する。
出土遺物 なし

R D08土坑 (第9図)

位 置 A I k22 平面形 不整円形
規 模 上端約1.0m・下端約0.7m、深さ約0.2m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入するA層からなる。
壁の状態 外傾して立ち上がる。
出土遺物 なし

R D09土坑 (第9図)

位 置 A I o24南部～A I p24北部 平面形 不整長楕円形
規 模 長軸上端約1.8m・下端約1.4m、短軸上端約0.6m・下端約0.3m、深さ約0.3m
掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。黄褐色土粒が混入しており、その割合により2層に細別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D10土坑（第9図）

位 置 A I n23北部 平面形 不整長楕円形

規 模 長軸上端約1.8m・下端約1.7m、短軸上端約0.5m・下端約0.4m、深さ約0.2m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。さらに2層に細別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D11土坑（第9図）

位 置 A I m3北西隅部。一部、調査区外に延びる。 平面形 不整円形

規 模 上端約0.7m・下端約0.6m、深さ約0.2m

掘込面 IV層上面 検出面 IV層

埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。

壁の状態 直立気味に僅かに外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D12土坑（第9図）

位 置 A I j21北西部 平面形 不整円形

規 模 上端約1.0m・下端約0.8m、深さ約0.2m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。A層は2層に細別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D13土坑（第9図）

位 置 A I i23南東部 平面形 不整円形

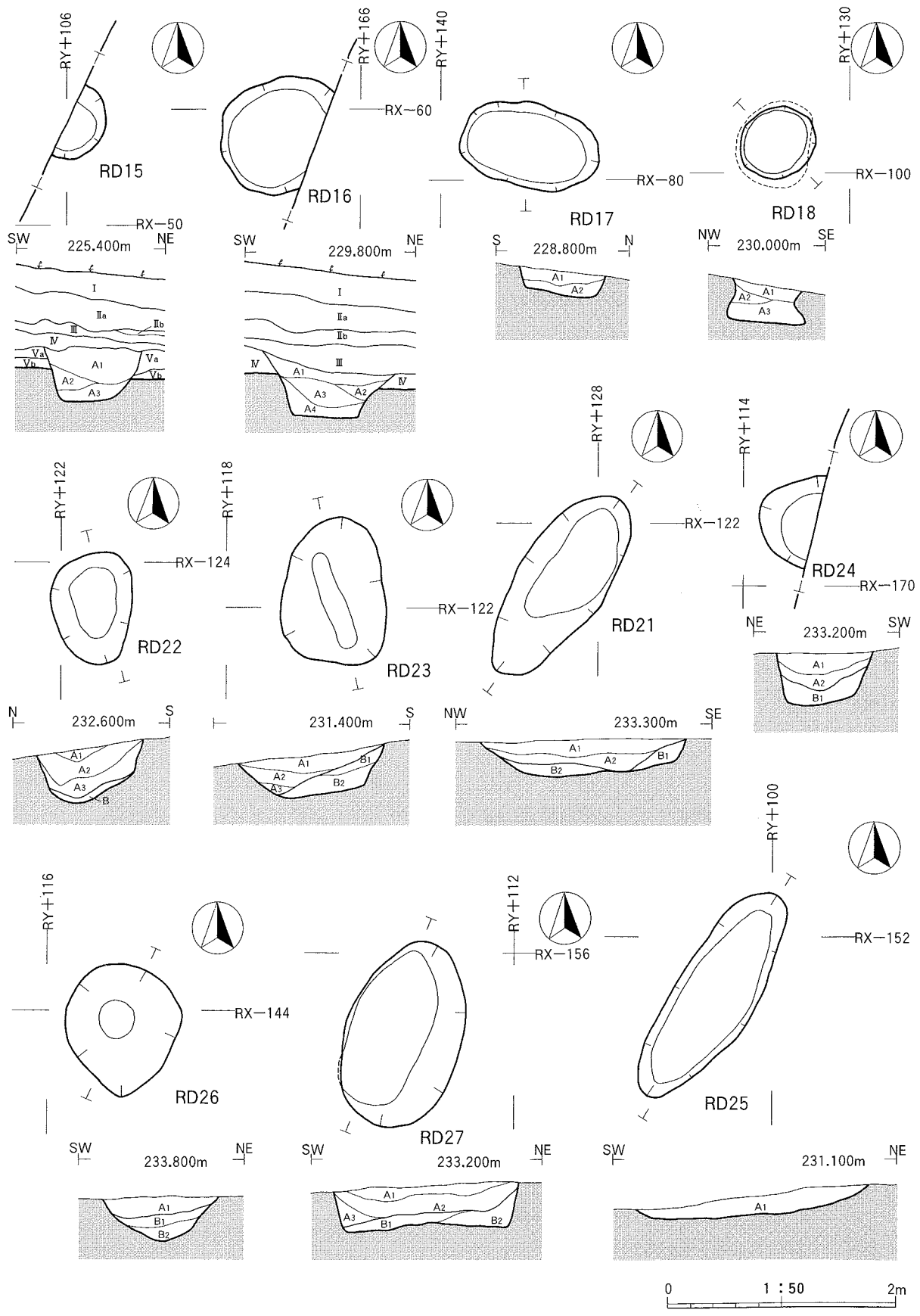
規 模 上端約0.4m・下端約0.3m、深さ約0.3m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし



第10图 RD15·16·17·18·21·22·23·24·25·26·27土坑

R D14土坑 (第9図)

位 置 A I i 22北東部 平面形 不整円形
規 模 上端約0.4m・下端約0.2m、深さ約0.2m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入するA層からなる。
壁の状態 外傾して立ち上がる。
出土遺物 なし

R D15土坑 (第10図)

位 置 A I g 22北端部。一部、調査区外へ延びる。 平面形 不整円形
規 模 上端約0.7m・下端約0.4m、深さ約0.5m
掘込面 IV層上面 検出面 V層
埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。さらに3層に細別される。
壁の状態 外傾して立ち上がる。
出土遺物 なし

R D16土坑 (第10図)

位 置 A II i 12南西隅部。一部、調査区外へ延びる。 平面形 不整円形
規 模 上端約1.1m・下端約0.9m、深さ約0.5m
掘込面 IV層上面 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。さらに4層に細別される。
壁の状態 外反して立ち上がる。
出土遺物 なし

R D17土坑 (第10図)

位 置 A II n 6 南西部 平面形 不整楕円形
規 模 長軸上端約1.2m・下端約1.0m、短軸上端約0.8m・下端約0.6m、深さ約0.2m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。さらに2層に細別される。
壁の状態 外傾して立ち上がる。
出土遺物 なし

R D18土坑 (第10図)

位 置 A II t 3 南西部 平面形 不整円形
規 模 上端約0.7m・下端約0.8m、深さ約0.4m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋 土 黒褐色土を主体とするA層からなる。さらに3層に細別される。
壁の状態 「く」字状に強く括れて立ち上がるフラスコ形を呈する。基底部径より開口部径が小さくなっている。

出土遺物 なし

R D19土坑 (第8図)

位置 A I w18 (R D20土坑と重複) 平面形 溝状の不整長楕円形
規模 長軸上端約4.3m・下端約4.1m、短軸上端約0.8m・下端約0.1m、深さ約1.4m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋土 A・B層の2層に大別される。さらに、A層は4層、B層は3層に細別される。
A層－黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入している層。
B層－暗褐色土を主体とし、黄褐色土が混入している層。最下層ではブロック状の黄褐色土が混入していた。
壁の状態 外傾して立ち上がり、壁高位は僅かに内彎しながら大きく外傾している。
出土遺物 なし

R D20土坑 (第8図)

位置 A I w18 (R D19土坑と重複) 平面形 溝状の不整長楕円形
規模 (検出部分) 長軸上端約2.8m・下端約2.6m、短軸上端約0.9m・下端約0.2m、深さ約1.1m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋土 A・B層に大別される。
A層－黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入している層。3層に細別される。
B層－暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒が多量に混入している層。2層に細別される。
壁の状態 外傾して立ち上がり、壁高位はさらに傾きが強くなる。
出土遺物 なし

R D21土坑 (第10図)

位置 A II y 2 北東部 平面形 不整楕円形
規模 長軸上端約1.8m・下端約1.2m、短軸上端約0.8m・下端約0.5m、深さ約0.4m
掘込面 削平 検出面 IV層
埋土 A・B層に大別される。
A層－黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入している層である。2層に細別される。上層のA1層にはスコリアが若干含まれる。
B層－褐色土を主体とし、黒褐色土粒、黄褐色土粒を含む層である。
壁の状態 外傾して立ち上がる。南西側の壁が傾きを大きくする。
出土遺物 なし

R D22土坑 (第10図)

位置 A II y 1 南西部 平面形 不整楕円形
規模 長軸上端約0.9m・下端約0.6m、短軸上端約0.7m・下端約0.4m、深さ約0.5m
掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 A・B層に大別される。さらにA層は3層に細別される。
A層－黒褐色土を主体とし、褐色土粒を含む層である。最上層のA1層では炭化物が、A3層ではスコリア粒が僅かに認められる。
B層－褐色土を主体とし、黒褐色土粒、黄褐色土粒が混入している層である。

壁の状態 凸状に彎曲した基底面から外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D23土坑 (第10図)

位 置 A I y25北部 平 面 形 不整楕円形

規 模 長軸上端約1.3m・下端約0.9m、短軸上端約0.9m・下端約0.2m、深さ約0.4m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 A・B層に大別される。さらにA層は3層、B層は2層に細別される。
A層－黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入している層である。A1層ではスコリア粒が微量含まれていた。
B層－暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒を含む層である。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D24土坑 (第10図)

位 置 B I l24北部 平 面 形 不整円形。一部、調査区外に延びる。

規 模 上端約0.8m・下端約0.6m、深さ約0.4m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 A・B層に大別される。さらにA層は2層に細別される。
A層－黒褐色土を主体とし、褐色土粒、黄褐色土粒を含む層である。
B層－暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒が混入している層である。

壁の状態 僅かに外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D25土坑 (第10図)

位 置 B I g20南部 平 面 形 不整長楕円形

規 模 長軸上端約2.1m・下端約1.8m、短軸上端約0.7m・下端約0.6m、深さ約0.2m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が含まれるA層からなる。

壁の状態 若干内彎しながら、緩やかに立ち上がる。

出土遺物 なし

R D26土坑 (第10図)

位 置 B I e24南西隅 平 面 形 不整円形

規 模 上端約1.2m・下端約0.3m、深さ約0.4m

掘込面 削平 検出面 IV層

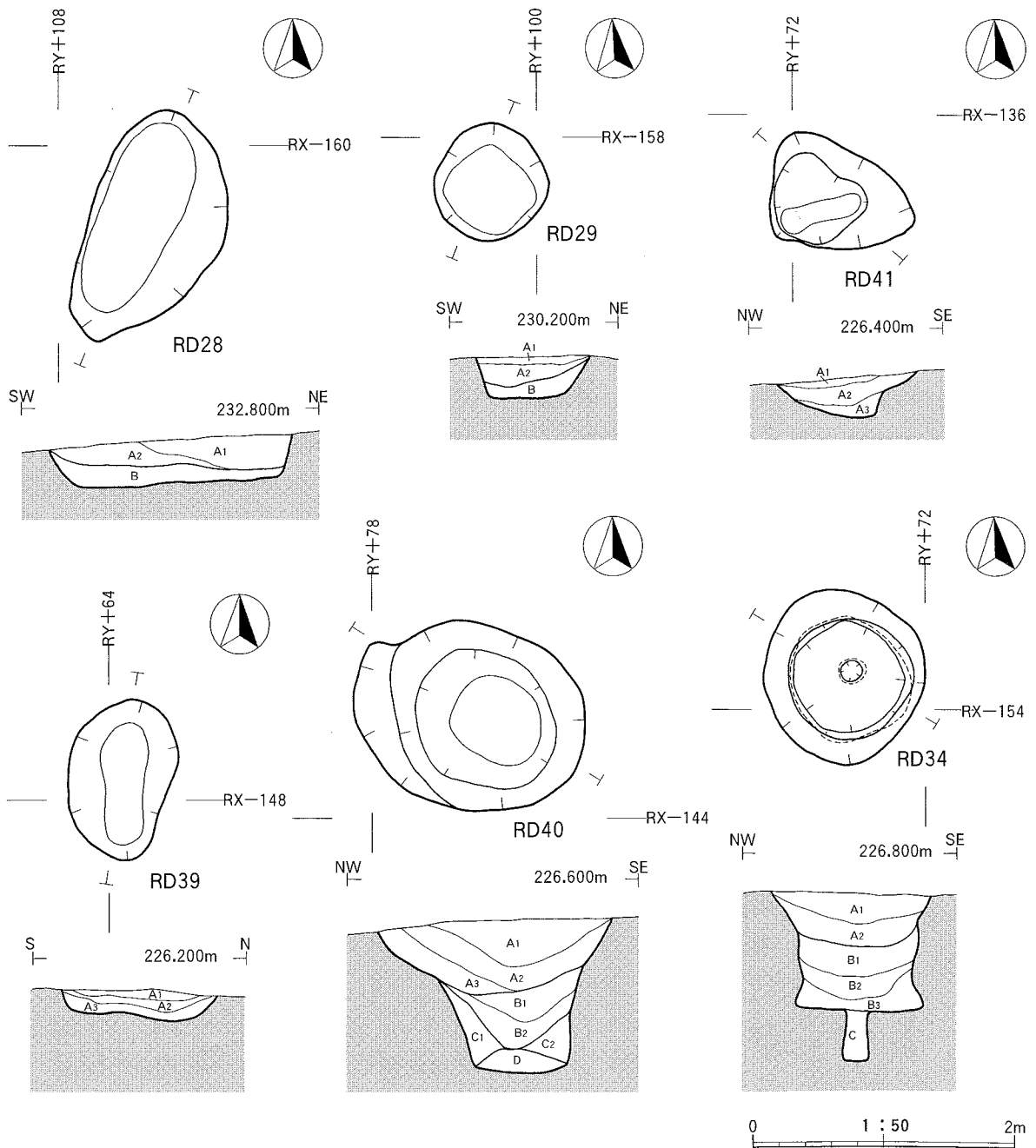
埋 土 A・B層に大別される。さらにA層は2層に細別される。

A層-暗褐色土を主体とし、褐色土粒が混入している層である。上層のA1層にはスコリア粒が若干含まれている。

B層-褐色土を主体とし、黄褐色土粒を含む層である。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし



第11図 R D 28・29・34・39・40・41土坑

R D27土坑 (第10図)

位 置	B I h23南部	平 面 形	不整楕円形
規 模	長軸上端約1.7m・下端約1.4m、短軸上端約1.0m・下端約0.7m、深さ約0.4m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	A・B層に大別され、A層は3層、B層は2層に細別される。 A層－黒褐色土を主体とし、褐色土粒、黄褐色土粒が含まれる層である。 B層－褐色土を主体とし、黄褐色土粒が含まれる層である。		
壁の状態	僅かに外傾して立ち上がる。東側の壁は傾きが大きい。		
出土遺物	なし		

R D28土坑 (第11図)

位 置	B I i22南東隅	平 面 形	不整楕円形
規 模	長軸上端約1.9m・下端約1.5m、短軸上端約1.0m・下端約0.6m、深さ約0.3m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	A・B層に大別される。さらにA層は2層に細別される。 A層－黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が含まれる層。スコリア粒も若干含まれる。 B層－黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が多量に含まれる層である。		
壁の状態	外傾して立ち上がる。南東側の壁は傾きが大きい。		
出土遺物	なし		

R D29土坑 (第11図)

位 置	B I i20北東部	平 面 形	不整円形
規 模	上端約0.9m・下端約0.6m、深さ約0.3m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	A・B層に大別される。A層は2層に細別される。 A層－黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が含まれる層である。A2層には、褐色土粒も含まれる。 B層－褐色土を主体とし、黒褐色土粒、黄褐色土粒が少量含まれる層。		
壁の状態	外傾して立ち上がる。		
出土遺物	なし		

R D30土坑 (第8図)

位 置	B I n21西部	平 面 形	溝状の不整長楕円形
規 模	長軸上端約3.6m・下端約3.2m、短軸上端約1.0m・下端約0.1m、深さ約0.7m		
掘 込 面	削平	検 出 面	IV層
埋 土	A・B層に大別され、A層は2層、B層は3層に細別される。 A層－黒褐色土を主体とし、褐色土粒、黄褐色土粒が含まれる層である。 B層－暗褐色土を主体とし、多量の褐色土粒と黄褐色土粒を含む層である。		

壁の状態 僅かに外傾して立ち上がり、壁高位は大きく外傾している。

出土遺物 なし

R D31土坑 (第8・13図)

位置 B I s 7南端部。一部、調査区外に延びる。 平面形 溝状の不整長楕円形
規模 (検出部分) 長軸上端約1.5m・下端約1.1m、短軸上端約0.8m・下端約0.2m、深さ約0.9m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 A・B層からなり、A層は3層、B層は2層に細別される。

A層—黒褐色土を主体とし、褐色土粒、黄褐色土粒を含む層である。

B層—黒褐色土を主体とし、多量の黄褐色土粒が混入している層である。

壁の状態 基底面から直立気味に立ち上がり、中段で傾きを変え、大きく外傾して立ち上がる。

出土遺物 縄文土器片が8点出土し、うち2点を図示した。7は、僅かに結束が認められるため、羽状縄文と考えられる。7・8ともに胎土には石英・砂粒及び繊維が含まれている。

いずれもA層から出土しており、本遺構上部に形成された遺物包含層からの流入である蓋然性が高い。

R D32土坑 (第12図)

位置 B I q 10北東部 平面形 不整円形

規模 上端約1.2m・下端約1.0m、深さ約0.6m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 A・B・C層に大別される。さらに、A・B層はそれぞれ2層に細別される。

A層—黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、黄褐色土粒が混入している層である。

B層—黒褐色土を主体とし、褐色土粒、黄褐色土粒が含まれている。スコリア粒も若干認められる。

C層—黒褐色土を主体とする層。黄褐色土粒を若干含んでいる。

壁の状態 概ね、外傾して立ち上がるが、北東部においては、「く」字状に彎曲している。フラスコ形を呈していたと想定される。

底の状態 基底面において「十」字状に交差した溝が認められた。

出土遺物 なし

R D33土坑 (第12図)

位置 B I j 13南西隅 平面形 不整円形

規模 上端約1.3m・下端約0.9m、深さ約1.0m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 A・B層に大別され、A層は3層、B層は4層に細別される。

A層—黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、黄褐色土粒が含まれる層である。

B層—暗褐色土を主体とし、黒褐色土粒、黄褐色土が含まれる層である。黄褐色土は粒状あるいはブロック状で点在しており、壁際のB2層においては、ブロックが顕著である。

壁の状態 中段に括れを有する「く」字状を呈する。いわゆるフラスコ形である。

出土遺物 なし

R D 34土坑 (第11図)

位置 B I h 13北端部 平面形 不整円形

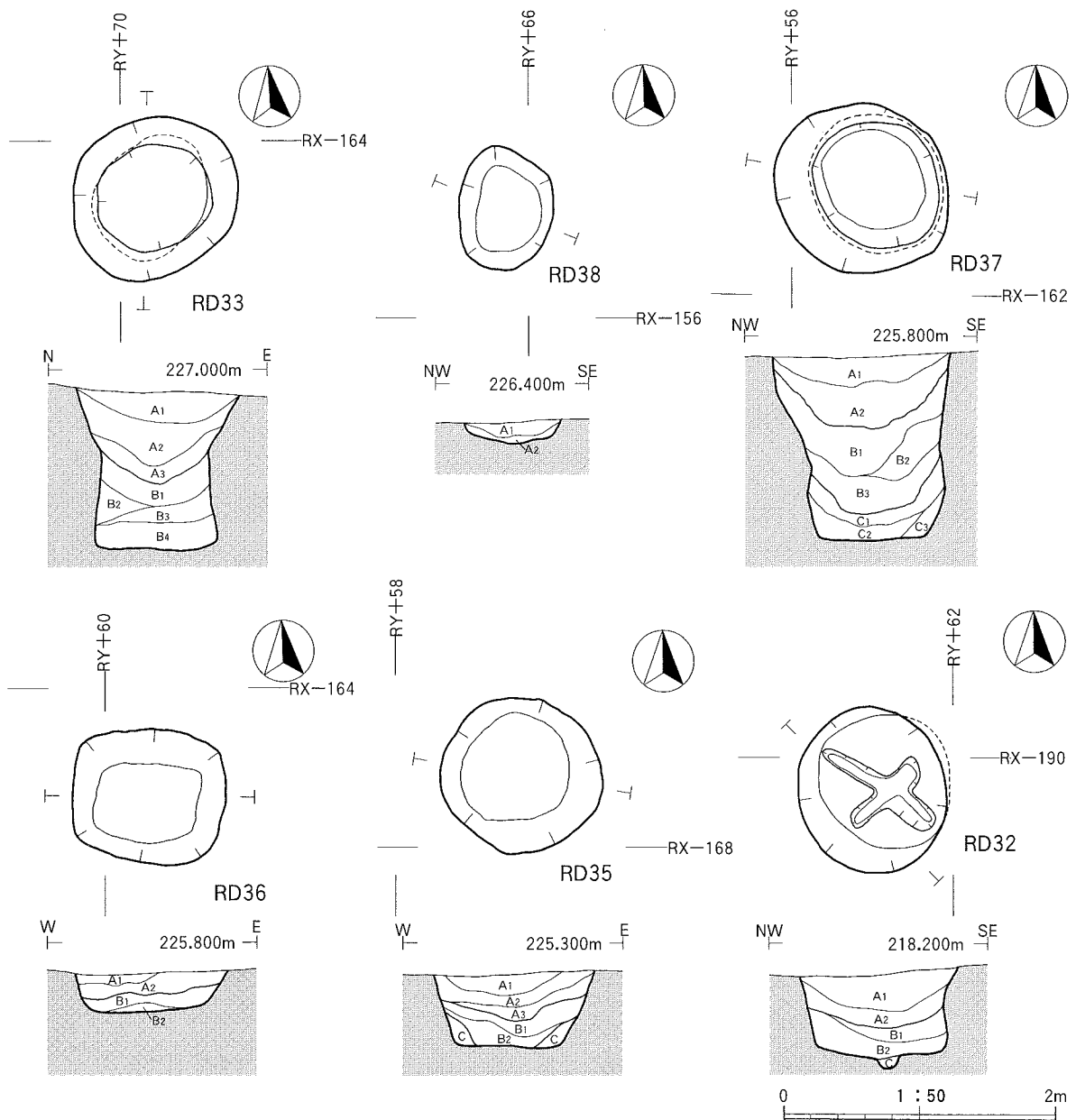
規模 上端約1.3m・下端約0.8m、深さ約0.9m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 A・B層に大別され、A層は2層、B層は3層に細別される。

A層—黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、黄褐色土粒が含まれる層である。

B層—黒褐色土を主体とし、黄褐色土が含まれる層である。黄褐色土は、層両端においてはブロック状に混入しており、壁の崩落土と考えられる。



第12図 R D 32・33・35・36・37・38土坑

壁の状態 壁低位は内傾し、中位は内彎して立ち上がり、高位は大きく外傾する形態を呈している。フラスコ形の土坑で、壁が大きく崩落したものと考えられる。

底の状態 基底面のほぼ中央で径約15cm、深さ約40cmの小坑が穿たれていた。

出土遺物 なし

R D 35土坑 (第12・13図)

位置 B I k 10南西部 平面形 不整円形

規模 上端約1.2m・下端約0.8m、深さ約0.6m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 A～C層の3層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とし、黒色土粒、黄褐色土粒、スコリア粒が混入している層。

B層—黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が含まれる層。2層に細分され、両者ともに炭化物も含まれている。

C層—黄褐色土を主体とし、褐色土粒と極微量の炭化物が含まれる層である。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 縄文時代中期の土器片が出土した。単節の地文が斜位に施され、胎土には微細な砂粒が含まれている。

R D 36土坑 (第12図)

位置 B I j 10～B I k 10 平面形 不整楕円形

規模 長軸上端約1.1m・下端約0.8m、短軸上端約1.0m・下端約0.6m、深さ約0.3m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 A・B層からなり、両層ともに2層に細別される。

A層—暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒が含まれる層。下層のA 2層ではスコリア粒が極僅かに認められる。

B層—褐色土を主体とし、黒褐色土粒、黄褐色土粒が混入している層である。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D 37土坑 (第12・13図)

位置 B I j 9北端部 平面形 不整円形

規模 上端約1.3m・下端約0.7m、深さ約1.4m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 A・B・C層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とする層である。褐色土粒、黄褐色土粒が含まれるA 1層と、より多量に含まれるA 2層に細別される。

B層—暗褐色土を主体とし、黒褐色土粒、褐色土粒、黄褐色土粒が含まれる層である。

C層—黄褐色シルトを主体に、黒褐色土及び褐色土が混在している層である。基調となる黄褐色シルトはブロック状をなすものも看取される。壁の崩落により形成された層と考えられる。

壁の状態 様相は一様ではないが、概ね、低位は内彎して立ち上がり、中・高位は外傾している。しかし、その傾きは小さく、直立に近い部分も認められる。フラスコ形を呈していたと想定される。

出土遺物 縄文中期の土器片が出土している。

R D 38土坑 (第12図)

位置 B I h 12西端部 平面形 不整円形

規模 上端約0.9m・下端約0.6m、深さ約0.1m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 黒褐色土に若干の黄褐色土粒が含まれるA層からなる。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D 39土坑 (第11図)

位置 B I f 11南西部 平面形 不整楕円形

規模 長軸上端約1.2m・下端約0.9m、短軸上端約0.8m・下端約0.3m、深さ約0.2m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋土 黒褐色土を主体とし、黄褐色土粒が含まれるA層からなる。A層はさらに3層に細別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

出土遺物 なし

R D 40土坑 (第11図)

位置 B I e 15西部 平面形 不整円形

規模 上端約1.1m・下端約0.6m、深さ約1.1m

掘込面 削平 検出面 IV層

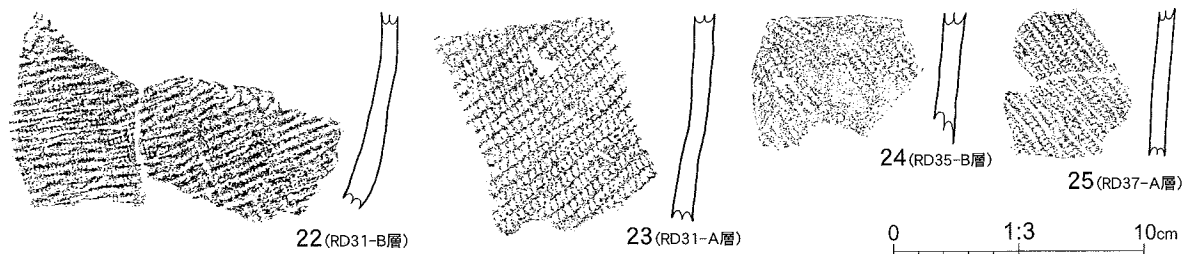
埋土 A～D層の4層からなる。

A層－黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒、黄褐色土粒が含まれる層。

B層－暗褐色土を主体とし、黒褐色土粒、黄褐色土粒が含まれる層。

C層－ブロック状の黄褐色シルトに、黒褐色土粒、暗褐色土粒、黄褐色土粒が混在した層である。

D層－黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒と黄褐色土粒が混入している層である。



第13図 土坑出土遺物 (土器)

壁の状態 外傾して立ち上がり、壁高位は大きく外傾する。西側の壁は張り出し部分を有している。壁に内傾する部分は認められないが、土層の堆積状態及び壁の崩落土と想定される埋土C層の在り様を勘案すれば、本遺構はフラスコ形を呈していた可能性もあげられる。

出土遺物 なし

R D41土坑 (第11図)

位 置 B I c 13南東部 平面形 不整楕円形

規 模 長軸上端約1.7m・下端約0.7m、短軸上端約1.5m・下端約0.7m、深さ約0.3m

掘込面 削平 検出面 IV層

埋 土 黒褐色土を主体とし、褐色土粒、黄褐色土粒が含まれるA層からなる。さらに3層に細別される。

壁の状態 壁西側は緩やかに、東側は傾きを大にして立ち上がる。壁高位は大きく外傾している。

出土遺物 なし

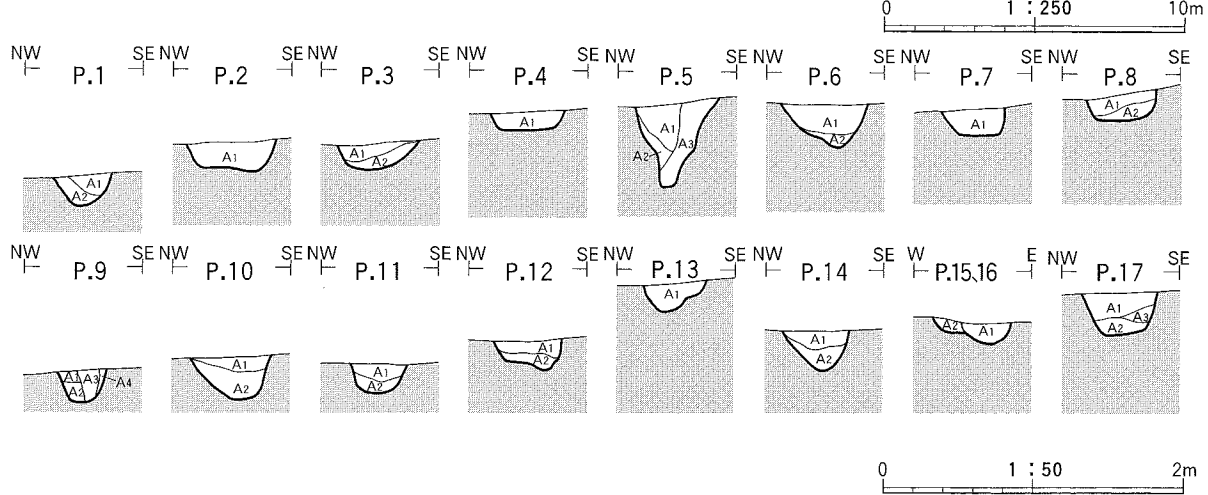
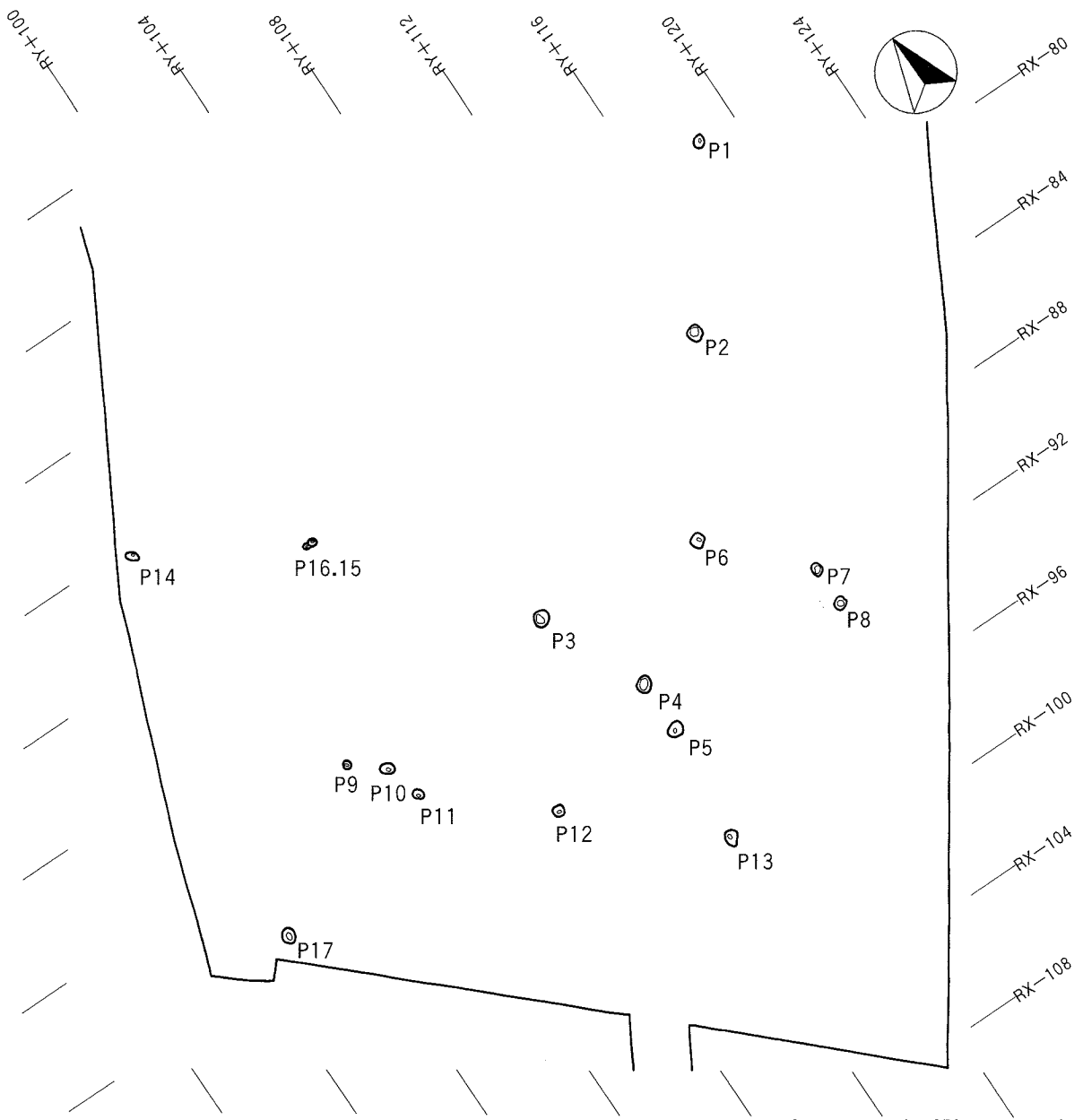
ピット群 (第14図)

第1次調査区西側区域において17口検出された。平面は不整円形を呈するものが主体となっている。

壁の形状は、平坦な基底面から外傾して立ち上がる形態と、緩やかに彎曲した基底面から僅かに内彎しながら立ち上がる形態が認められる。規模は、径約0.3～0.6m、深さ約0.1～0.6mを測る。

埋土は、黒褐色土を主体としている。単層のものは、地山粒の黄褐色シルト粒がほとんど含まれない黒褐色土が基調となっている。2層以上に細別されたものは、下層に黄褐色シルト粒が混入しており、上層にはほとんど認められない。土質は、堅い締りが若干認められた。

いずれのピットも他の遺構同様にIV層上面で検出されたが、平面位置、深さ等に規則性はなく、特定の遺構を想定させるものは看取されなかった。出土遺物は認められなかった。



第14図 ピット群

2. 遺物包含層

(1) 層相

遺物包含層は、第2次調査区域の北西部分と南西部分の2箇所において確認された。

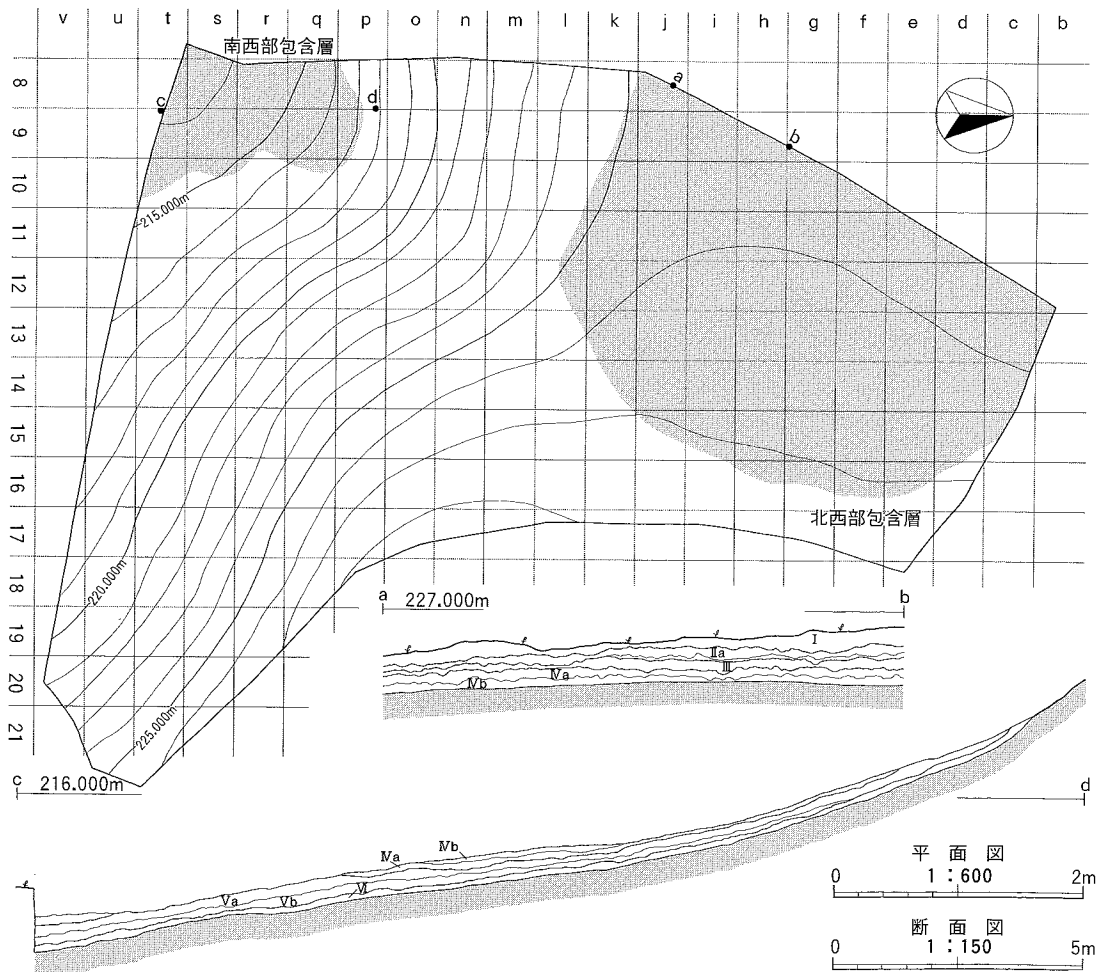
北西部包含層は尾根中位の平坦地において、南西部包含層は谷底付近の斜面上に形成されていた。両者はその立地及び堆積状況、包含層の形成過程等において様相を異にしている。そのため、両包含層の層位名は一致していない。

北西部 西側調査区域の北側、尾根中位の平坦部において検出された。

包含層 当該箇所においては、竪穴住居跡及び土坑が検出されているが、この検出面の下に縄文時代早期の包含層が形成されていた。

堆積土は、表土（I層）から硬質シルト層（V層）までの5層より成る。I層は表土、II・III層は黒褐色土を主体とする層である。黄褐色シルト粒、スコリア粒が含まれており、土質も比較的軟質で、締まりも疎い。I～III層においては、遺物はほとんど検出されていない。

IV層はIV a・IV b層の2層に細別される。暗褐色を主体とする層で、黄褐色シルト粒、スコリア粒



第15図 遺物包含層

が含まれている。Ⅰ～Ⅲ層に比して、土質は堅く締まっていた。

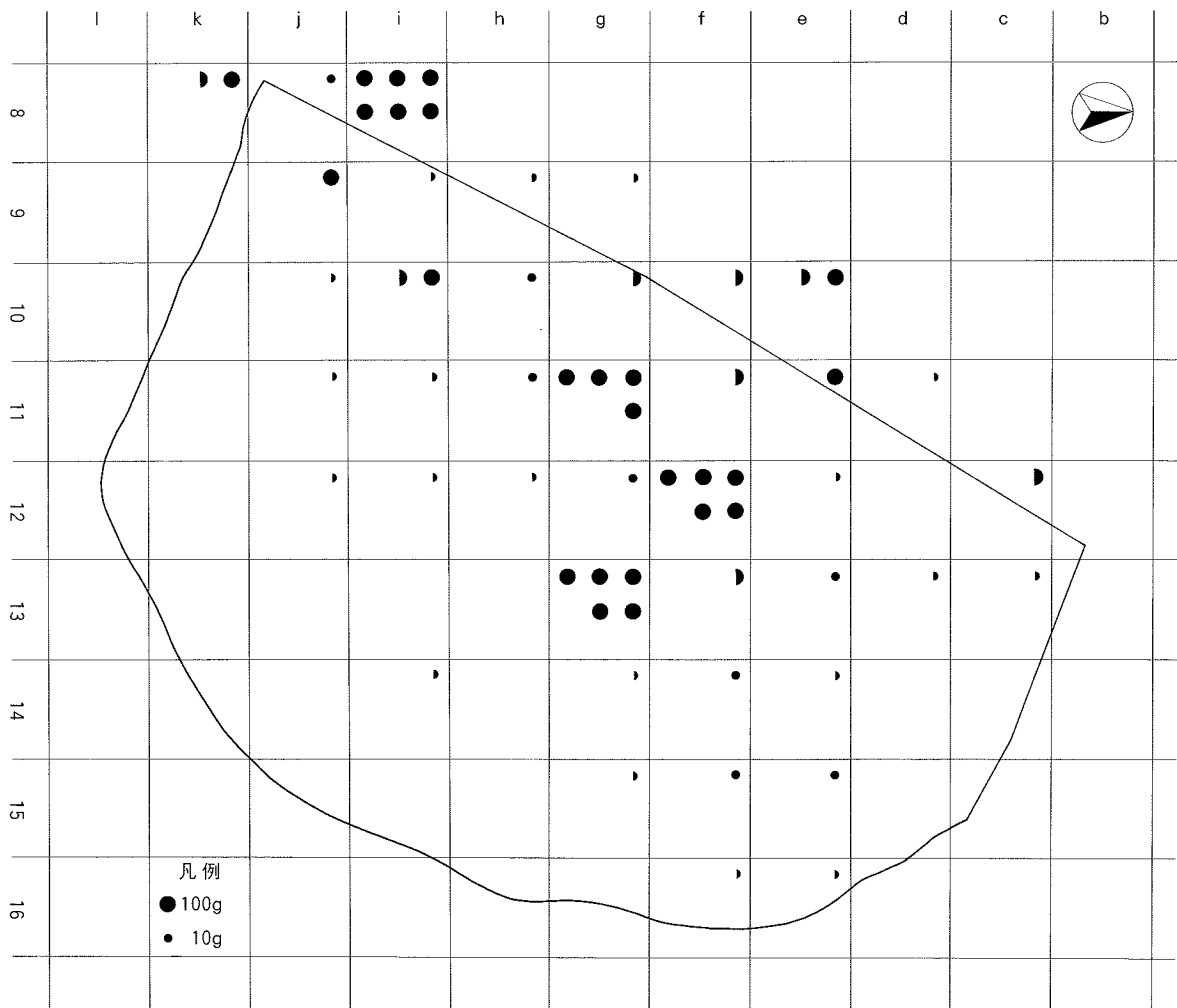
本層からは、縄文時代早期の土器及び石器が検出された。

南西部 南西部包含層は、谷底付近の斜面上に形成されていた。

包含層 当該箇所は、北東尾根から南西の谷底への斜面が播鉢状を呈する地形となっている。尾根中位の平坦地から谷までの比高差は10m以上あり、勾配も厳しい。包含層は斜面低位、播鉢の底に近い部分に形成されていた。

堆積土は、表土（Ⅰ層）から硬質シルト層（Ⅶ層）までの7層より成る。遺物はⅢ層以下で検出された。Ⅲ層は黒褐色土を主体とする層である。スコリア粒が含まれている。Ⅳ層は黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒、スコリア粒が含まれている。Ⅴ層は暗褐色に近い黒褐色土を主体とする層である。2層に細別される。黄褐色シルト粒、スコリア粒が含まれている。スコリア粒の混入量は、本層位が他より多いが、分けても下層のⅤb層が最も顕著である。

本包含層からは、縄文時代早期から晩期までの土器を主体に遺物が検出された。しかし、必ずしも層位的に出土したものではなく、土層の堆積状況等と勘案すれば、尾根上位からの流入土によって2次的に形成された包含層と考えられる。



第16図 北西部包含層 グリッド別土器出土量

(2) 出土遺物

遺物包含層からは、縄文時代早期から晩期に比定される土器や石器類が出土した。本書において、その全てを報告することは難しいため、各々の特徴が窺えるような遺物を抽出し、掲載した。

報告にあたっては、土器は各包含層別に図示し、石器は器種ごとに構成した。

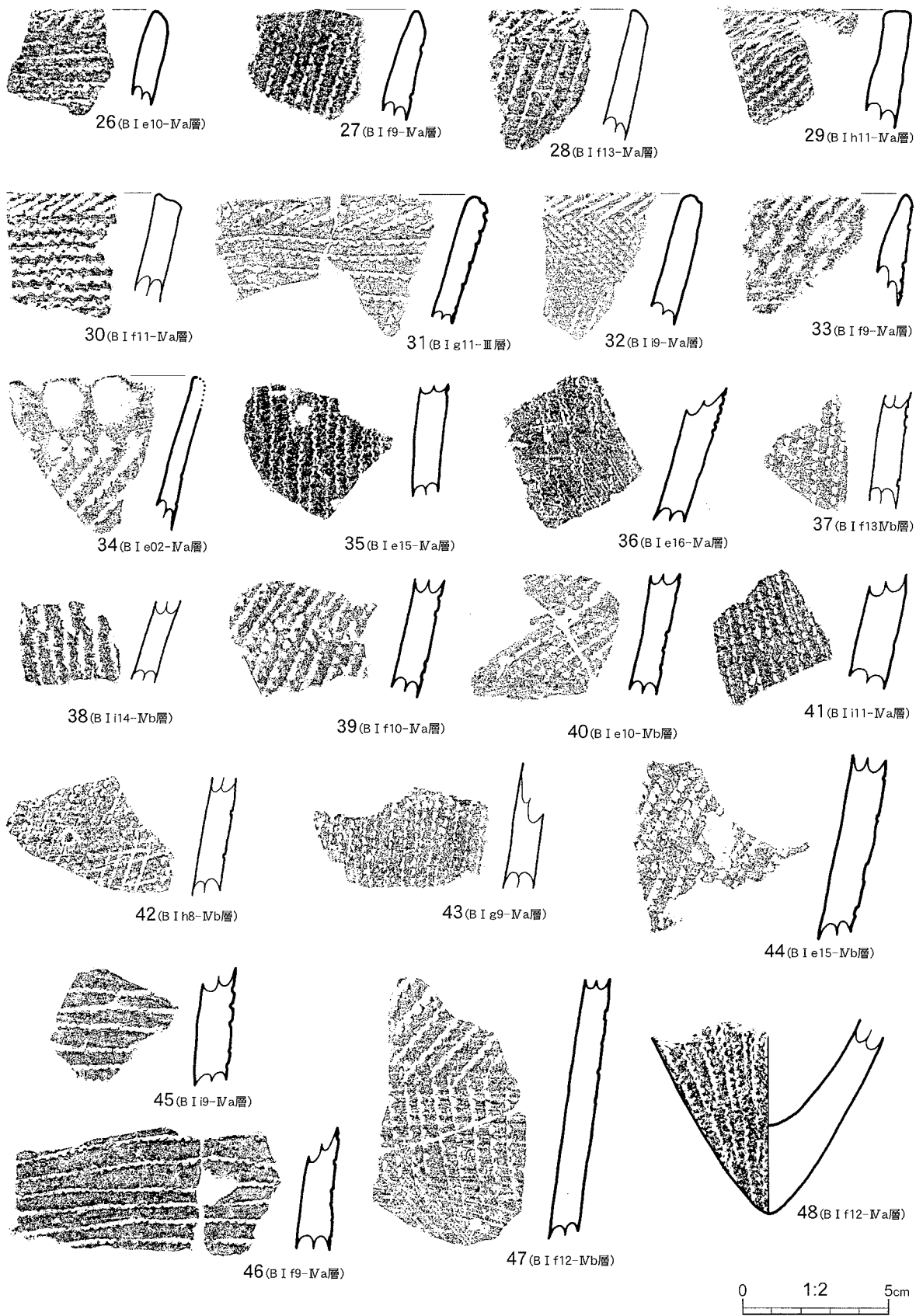
土 器 (第17～23図)

北 西 部 IV層を主体に、縄文時代早期の土器が確認された。

包 含 層 26～55は、貝殻腹縁文が施文されている土器である。48が如き砲弾形の尖底部から直線的に立ち上がり、口縁部に至る器形を呈する。口縁部は僅かに外反するものが認められ、口唇部は外削状を呈するものが主体となっている。口唇部には斜位、口縁部には斜位または横位の貝殻腹縁文が施文され、胴部はこれに縦位が加わる。26～34は深鉢の口縁部片である。いずれも口唇部に腹縁文が認められる。口縁部文様は、26・30・31は横位に、27・28・29・32・33・34は斜位に施文されている。32は口縁部下にも斜位の腹縁文が認められるが、施文方向は異なっている。35～46は、深鉢の胴部片である。いずれも貝殻腹縁文が密に施文されている。施文方向は、縦位・斜位・横位の3方向が認められる。47は深鉢胴下半部片である。上半部は斜位に、下半部は方向を変え、縦位に腹縁文が施文されている。48は底部片である。砲弾形を呈し、底まで縦位の腹縁文が施されている。49～52は胴部片で、斜位の腹縁文が認められる。53～55は深鉢の胴下半部片である。54は斜位の腹縁文が施文され、3条の沈線で区画され、その下に縦位の腹縁文が施されている。上記のいずれも胎土には、微細な石英や砂粒が含まれているものが顕著である。一部、微量の繊維を含むものも認められる。

56～59も貝殻腹縁文の土器であるが、沈線や刺突文が加わっている。56は、腹縁部の刺突と押圧による腹縁文が互層となっており、各々を沈線で区画している。57は横位の腹縁文が数条施文され、その下には刺突文が3段にわたり、さらに横位の腹縁文が施されている。58・59は深鉢胴部である。4～5条の平行沈線が引かれ、その間に斜位の腹縁文が配されている。いずれも胎土には、微細な石英や砂粒が僅かに含まれている。

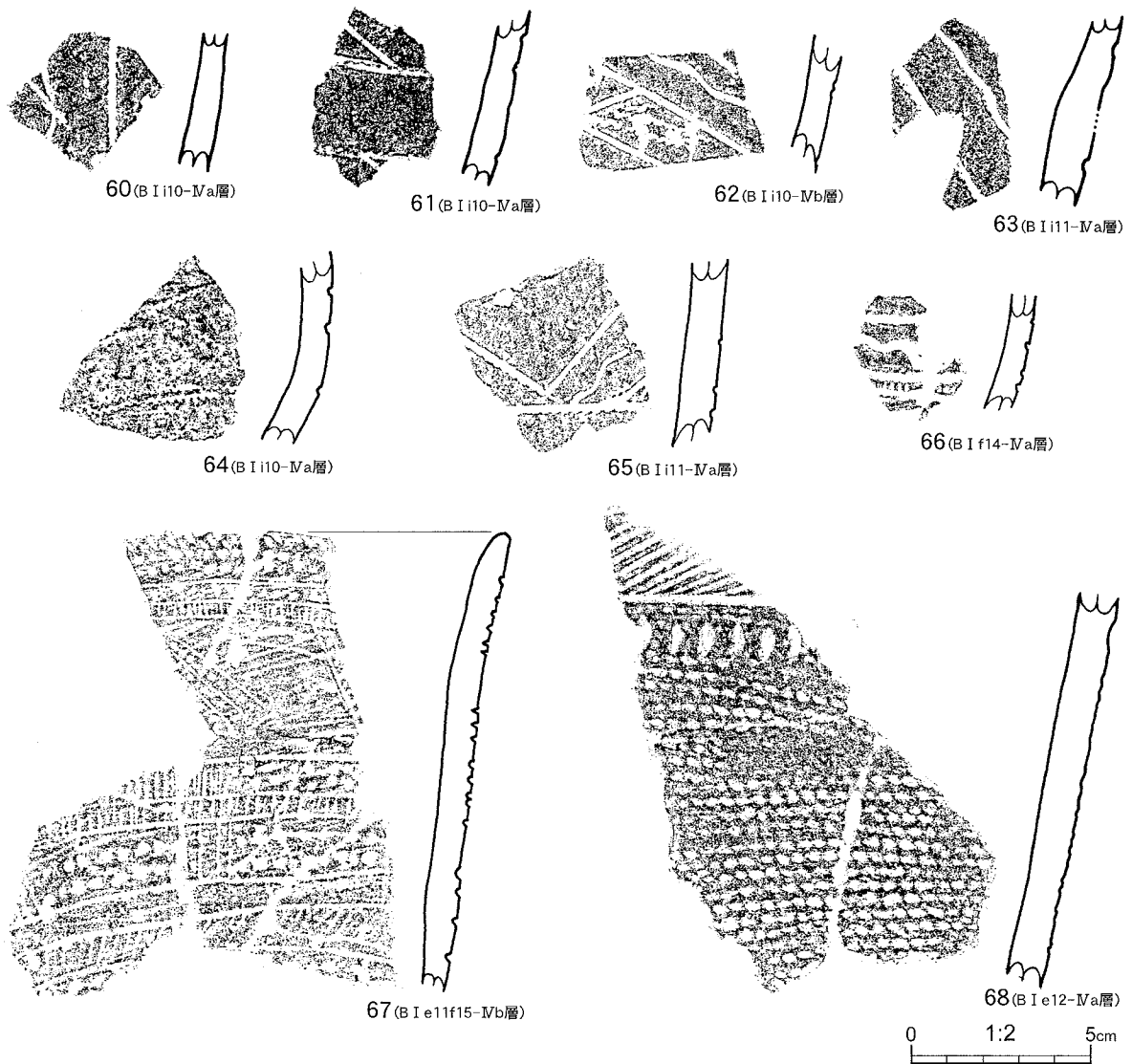
60～66は、深鉢胴部片で、器面に沈線と貝殻腹縁文で幾何学文様を描くものである。沈線は直線的なものと同様に波状を呈するものがある。62は2条の平行沈線の中に腹縁文が充填されている。64は貝殻腹縁文のみで文様を描いている。2段重なった横位の腹縁文を境に、器壁の勾配を変えており、口縁部から胴部にかけて屈曲する括れを有する器形を呈するものと考えられる。65も同様の器形で、横に引かれた腹縁文を境に括れを有している。ともに、胎土には微細な石英・砂粒が含まれている。66は胴部片である。2条の平行沈線の中に貝殻腹縁文が充填されている。胎土には微細な石英・砂粒が含まれ、僅かに繊維も認められる。67は深鉢の上半部である。口唇部に絡条体圧痕が認められ、口縁部には円形刺突文が施されている。文様帯は平行沈線と縦の短沈線による梯子状の帯状文様で区画されており、その中に円形刺突文と平行沈線による文様が配されている。胎土には砂粒が含まれている。68は深鉢胴部片である。密に引かれた斜位の平行沈線が施され、沈線で区画されたその下に爪形の刺突文が巡っている。沈線及び刺突文は他と比して深く抉られたもので、様相を異にしている。地文には捺糸文が施されている。胎土には微細な石英・砂粒が微量混入している。



第17図 北西部包含層出土遺物（土器）I



第18図 北西部包含層出土遺物（土器）Ⅱ



第19図 北西部包含層出土遺物（土器）Ⅲ

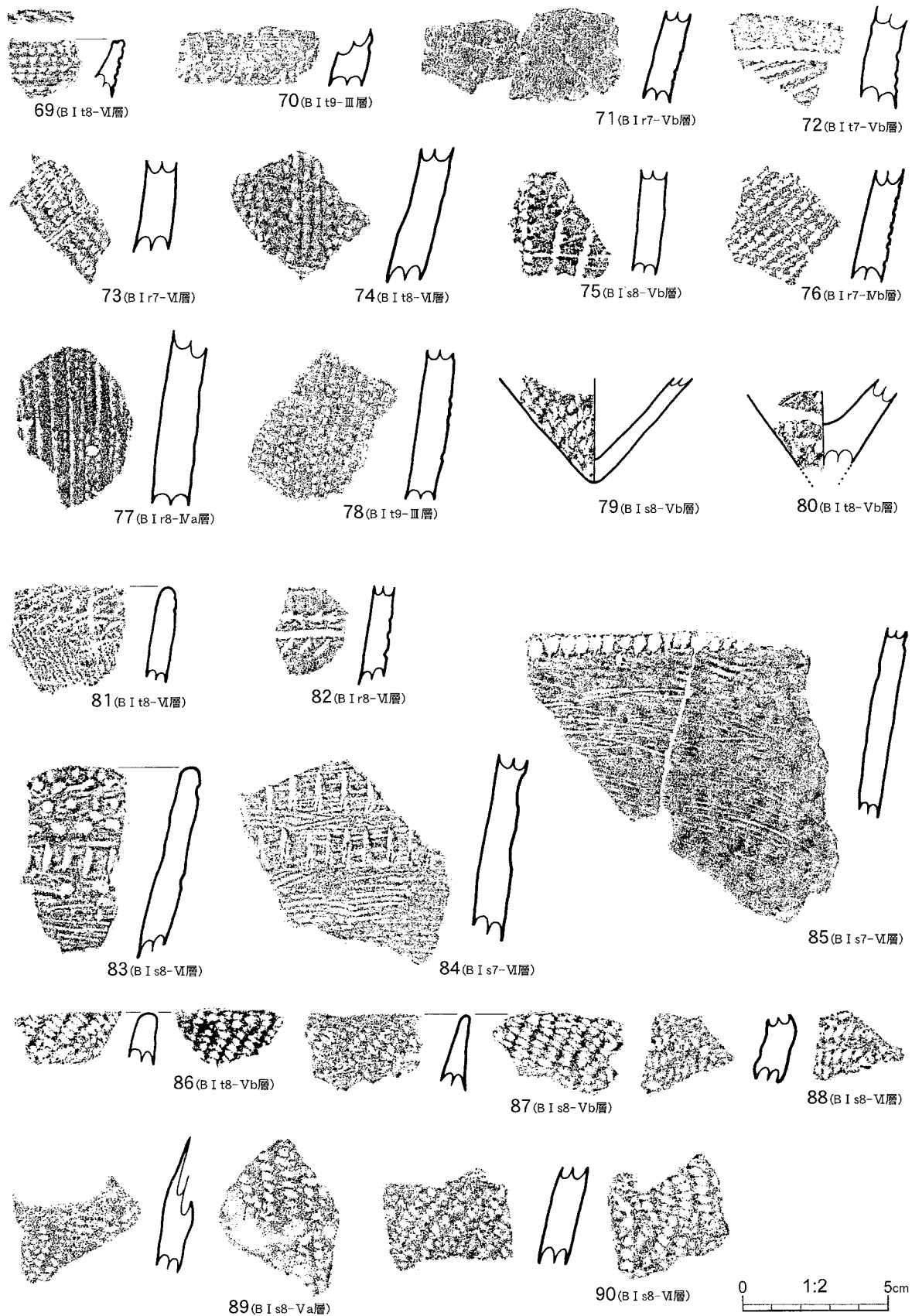
南西部 Ⅲ～Ⅵ層から縄文時代早期から晩期の土器が確認された。

包含層 出土量は、前期に帰属するものが最も多く、中期、早期がこれに次ぐ。後・晩期は僅少である。図は前期を中心に掲載した。

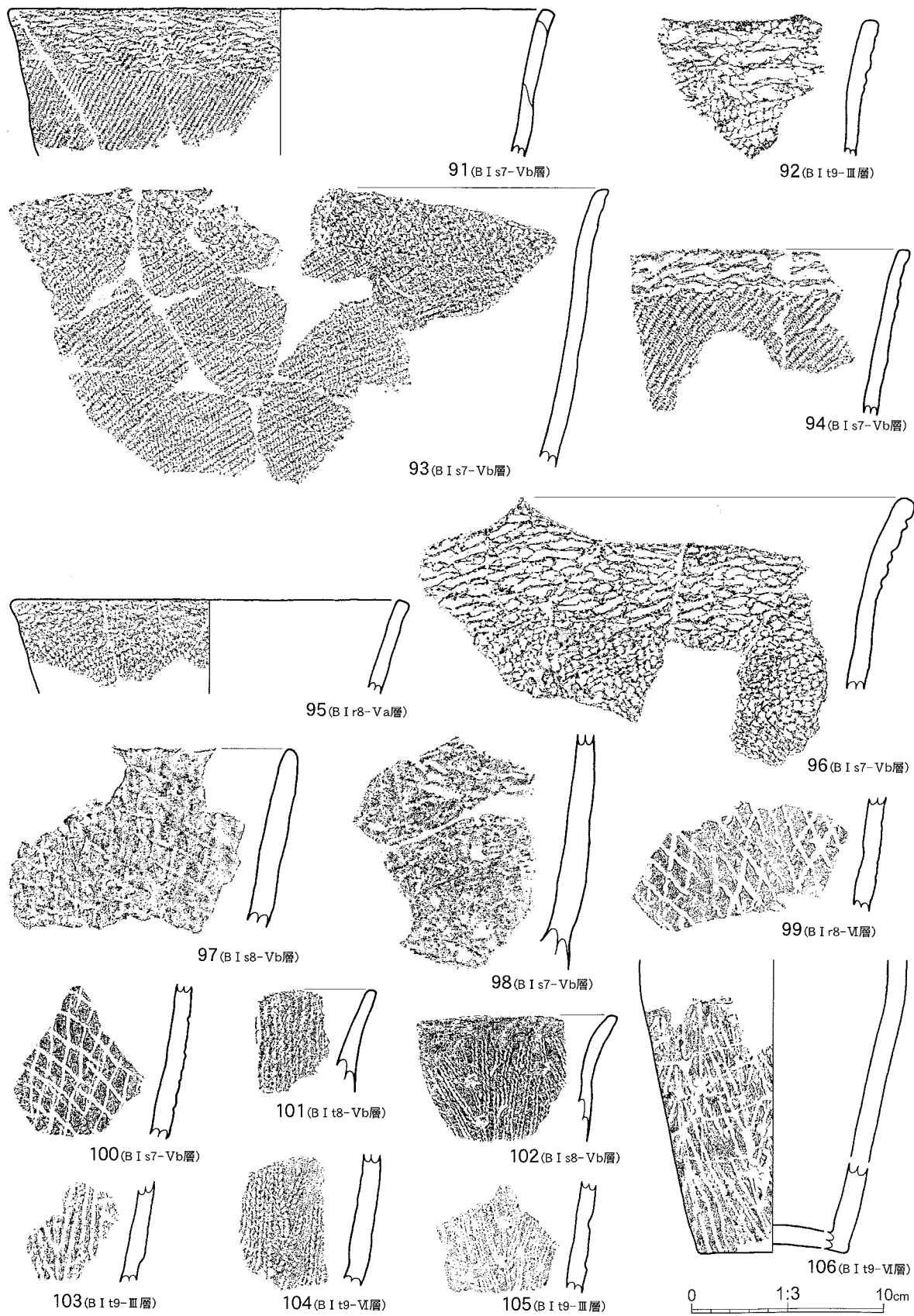
69～90は、早期の土器である。69～80は貝殻腹縁文が施文された土器である。69は深鉢の口縁部片である。平縁の口縁で、口唇部には斜位の腹縁文が施文されている。71は斜位の腹縁文が施されているが、数条のみで密に施文されていない。77・78は深鉢胴部片で、腹縁文が縦位に施されている。胎土には微細な石英・砂粒が微量含まれている。81～85は条痕文を地文とし、口縁部に刺突文を有する土器である。刺突文は爪形状を呈するものが主体となっている。81は深鉢の口縁部片。口唇部に斜位の原体圧痕があり、その下に爪形刺突文が2段施されている。83は深鉢の口縁部片である。口縁部に2段の円形刺突文が施され、その下に爪形状刺突文が1段と、さらに円形刺突文が1段認められる。84・85は深鉢の胴部片である。爪形状の刺突文が、84は2段、85は1段認められる。85の刺突文は若干幅が広く、柳葉形に近い。いずれも胎土には微細な石英・砂粒が含まれており、85には繊維も混入

している。86～90は器面表裏に縄文が施文されている土器である。86・87は深鉢の口縁部である。87は直線的に立ち上がり、86は口縁端部が僅かに外反している。ともに斜位の単節縄文が表裏面に施されている。

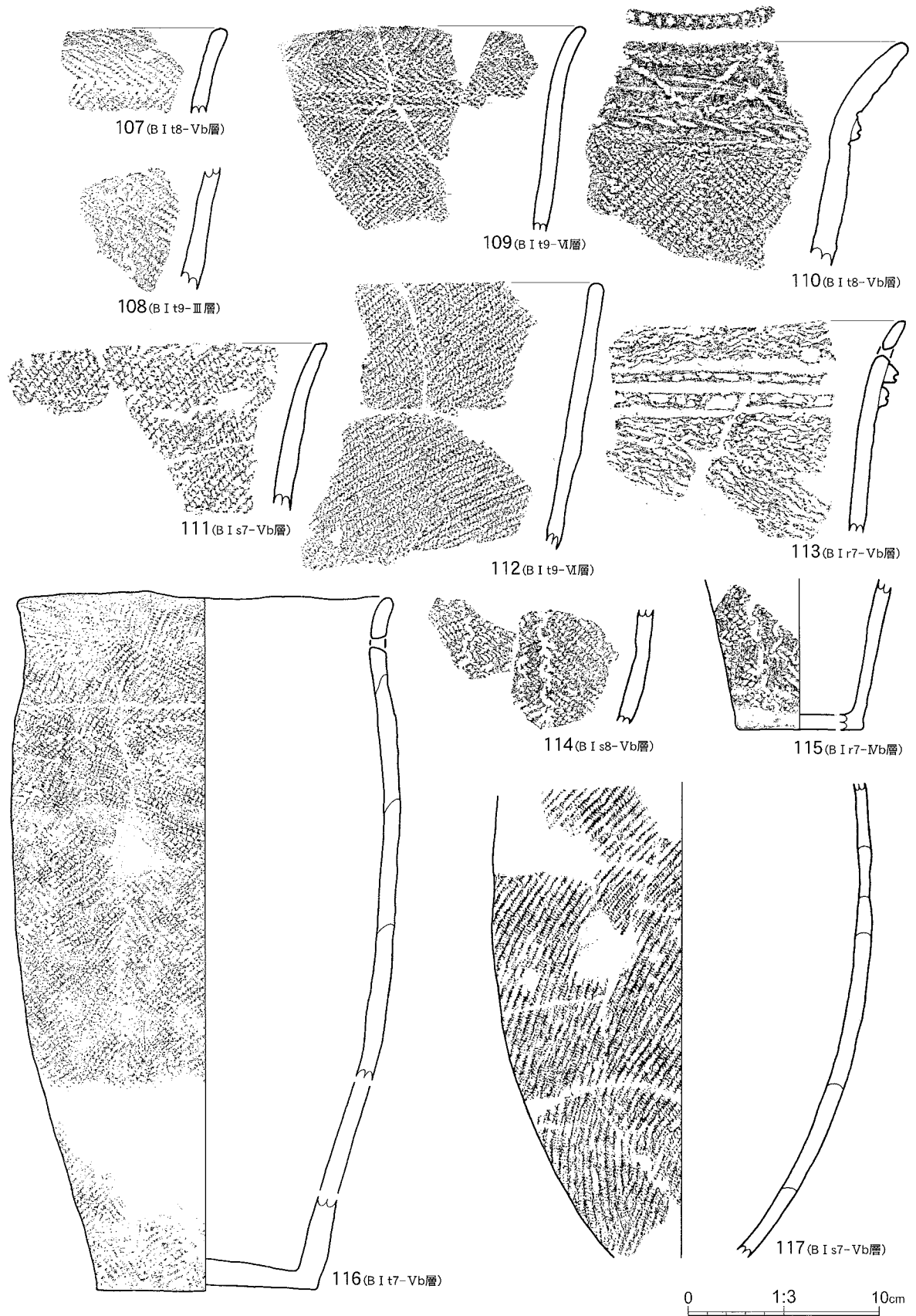
91～96は深鉢の口縁部である。胴部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する器形を呈する。文様は胴部に斜縄文が施され、口縁部には横走する綾絡文が認められる。量の多少はあるものの、いずれも胎土には繊維が含まれている。97～106は網目状、あるいは木目状に捺糸文が施された土器である。97は深鉢の口縁部。平縁の口縁部で、口縁部から胴部にかけて網目状捺糸文が認められる。98は深鉢胴下半部片である。胴部に網目状捺糸文が施文され、胴下部の底部付近は無文となっている。99・100は網目状捺糸文が施された胴部片で、胎土には繊維が含まれている。101・102は深鉢口縁部片で、口縁部が外反する器形を呈する。木目状に捺糸文が施されている。103～105は深鉢胴部片。木目状捺糸文が施され、胎土には繊維が含まれている。106は深鉢の胴下半部から底部。胴部から底部まで全体に木目状捺糸文が認められる。胎土には繊維が含まれている。107は口縁部片で、結束のない羽状縄文が施されている。109も深鉢口縁部片。外反する口縁部には羽状縄文が施され、原体圧痕を区画として胴部にも羽状縄文が展開している。110は胴部が緩やかに立ち上がり、口縁部が大きく外反する深鉢である。括れを有する頸部には、斜位の刺突文が施された隆帯が付されている。口縁部は原体圧痕が認められ、胴部には縦走する羽状縄文が認められる。原体圧痕は隆帯の上下にも施されている。113も隆帯が貼付された深鉢である。胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形を呈する。隆帯は2段にわたり付され、円形刺突文が巡っている。隆帯によって区画された口縁部及び胴部には不整捺糸文が施されている。口縁部には補修孔が認められる。胎土には微細な石英・砂粒、繊維が含まれている。108・114・115は深鉢の胴部及び底部である。単節の斜縄文が施され、その上から結節回転文が縦走している。108は小破片のためか結節回転文は1条のみが認められるが、114・115は複数条施文されている。いずれも胎土には微量の繊維が含まれている。116は胴部が緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する器形を呈する深鉢である。口頸部には横走する羽状縄文が2段にわたり施され、胴部は回転方向を変え、縦走している。口縁部には補修孔が認められる。胎土には微細な石英・砂粒、少量の繊維が含まれている。118は横位の羽状縄文が施されている深鉢の胴部片である。119は直線的な胴部が外傾しながら立ち上がる器形を呈する深鉢である。器面全体に縦位の捺糸文が施されている。胎土には繊維が含まれている。120も胴部が直線的に立ち上がる深鉢である。器外面には多軸絡条体が施されている。器内面は比較的丁寧に磨かれている。胎土には金雲母が含まれている。121は深鉢の胴部片である。原体圧痕された隆帯が2段にわたり付されている。122・125は深鉢の胴部片。斜縄文を地文としている。123・124は横位の羽状縄文が施された深鉢胴部である。126は縦位の捺糸文が施され、器内面は磨かれている。127は斜縄文と2段の結節回転文が施されている。129～131は深鉢の胴部及び底部で、横位の羽状縄文が認められる。



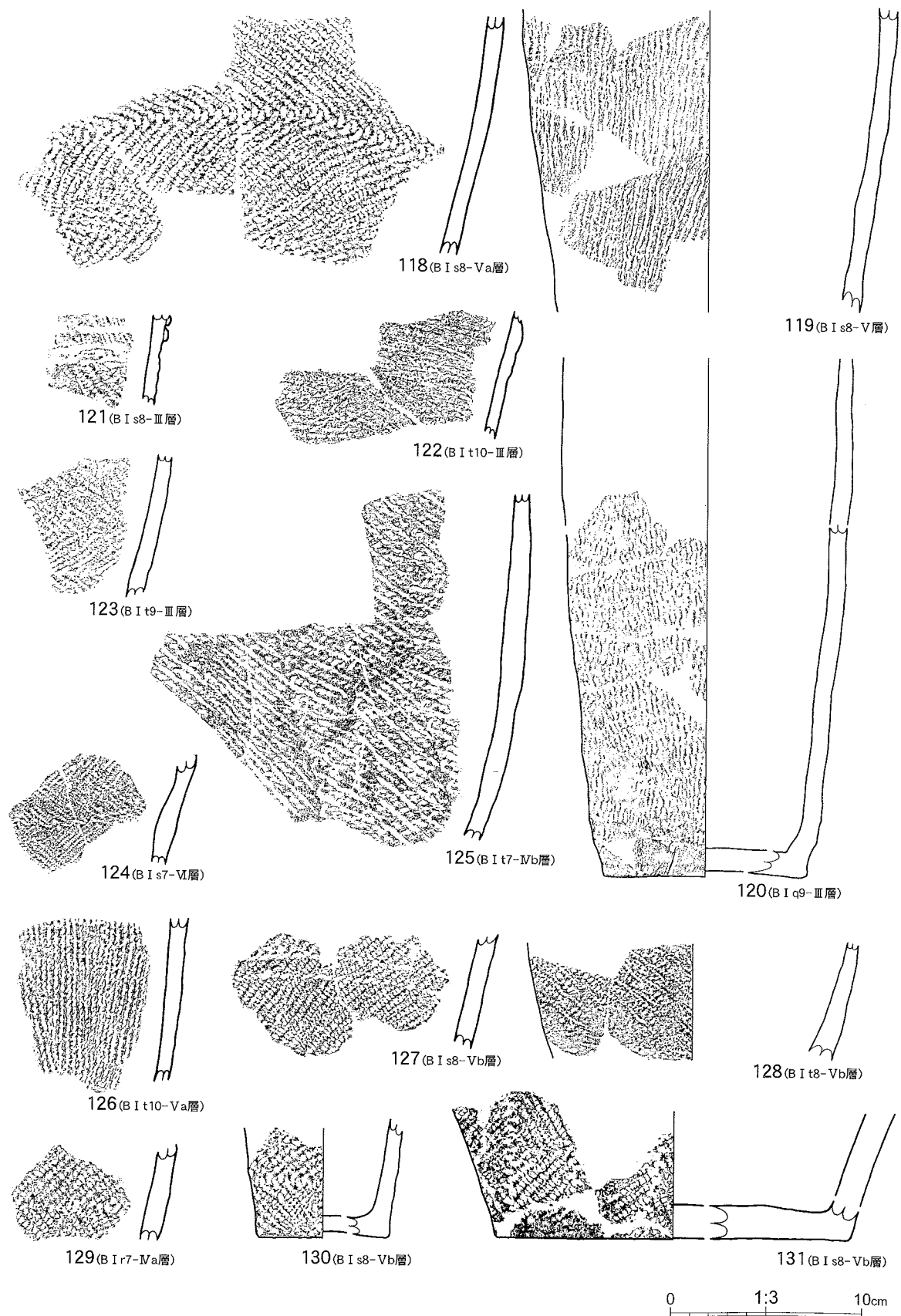
第20図 南西部包含層出土遺物（土器）I



第21図 南西部包含層出土遺物（土器）Ⅱ



第22図 南西部包含層出土遺物（土器）Ⅲ



第23図 南西部包含層出土遺物（土器）Ⅳ

石器（第24～31図）

石鏃・石匙等の剥片石器、石皿・敲石等の礫石器、石核、剥片等が出土した。剥片石器、礫石器ともに北西部包含層、南西部包含層の両方から出土している。石核・剥片類は北西部包含層からの出土が顕著である。

挿図の掲載に当たっては、石器類は毀損の著しいものを除き掲載した。石核・剥片類は、一部を抽出し掲載した。

石 鏃 13点出土し、うち11点を図示した。出土数は剥片石器中の約1/3を占める。132～138は無茎鏃で、抉りを有する。141は鏃身が二等辺三角形を呈する無茎鏃である。139・142は基部が丸く張り出した尖基鏃である。142は出土した石鏃中最大のもので、全長約5.1cm、最大幅約2.2cm、最大厚約1.0cmを測る。140は有茎鏃であるが、基部を欠損している。石材は135・140がチャートで、以外は硬質頁岩を使用している。

石 錐 2点出土した。ともに頭部と身部の区別がない棒状を呈する。側縁部は、143が僅かに彎曲しており、144が直線的である。横断面は不整菱形を呈するが、144は三角形に近い形状である。ともに硬質頁岩を材料としている。

石 匙 8点出土した。縦長形と横長形の2形状がある。全て上部に摘み部を有する。148・149・150・152は両面に剥離調整が加わえられているが、以外は片面のみの調整である。縦長形は148を除き、両側縁部に刃部を作りだしている。横長形のもの側縁部全てに刃部を作り出している。石材は全て硬質頁岩を使用している。

石 筥 12点出土し、うち9点を図示した。出土数は石鏃に次いで多い。形状は概ね長楕円形で、側縁部と下部に刃部を作り出している。石材は全て硬質頁岩を使用している。

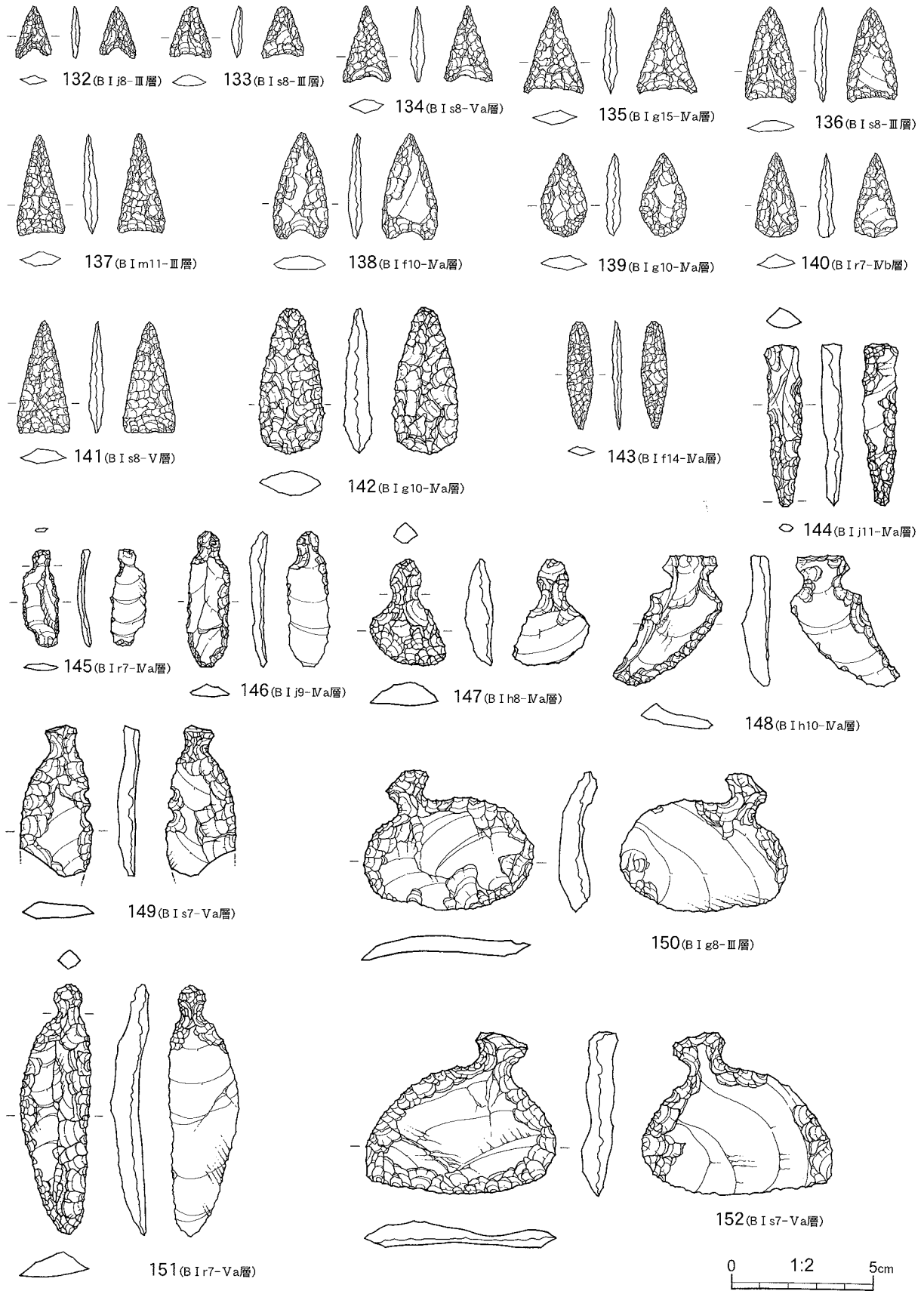
磨製石斧 6点出土し、うち2点を図示した。198は下半部を欠損しているが、2つとも短冊形を呈する。石材には凝灰岩を使用している。

石 錘 1点出土している。扁平な石の小口側両端部を打ち割ったものである。凝灰岩を石材としている。

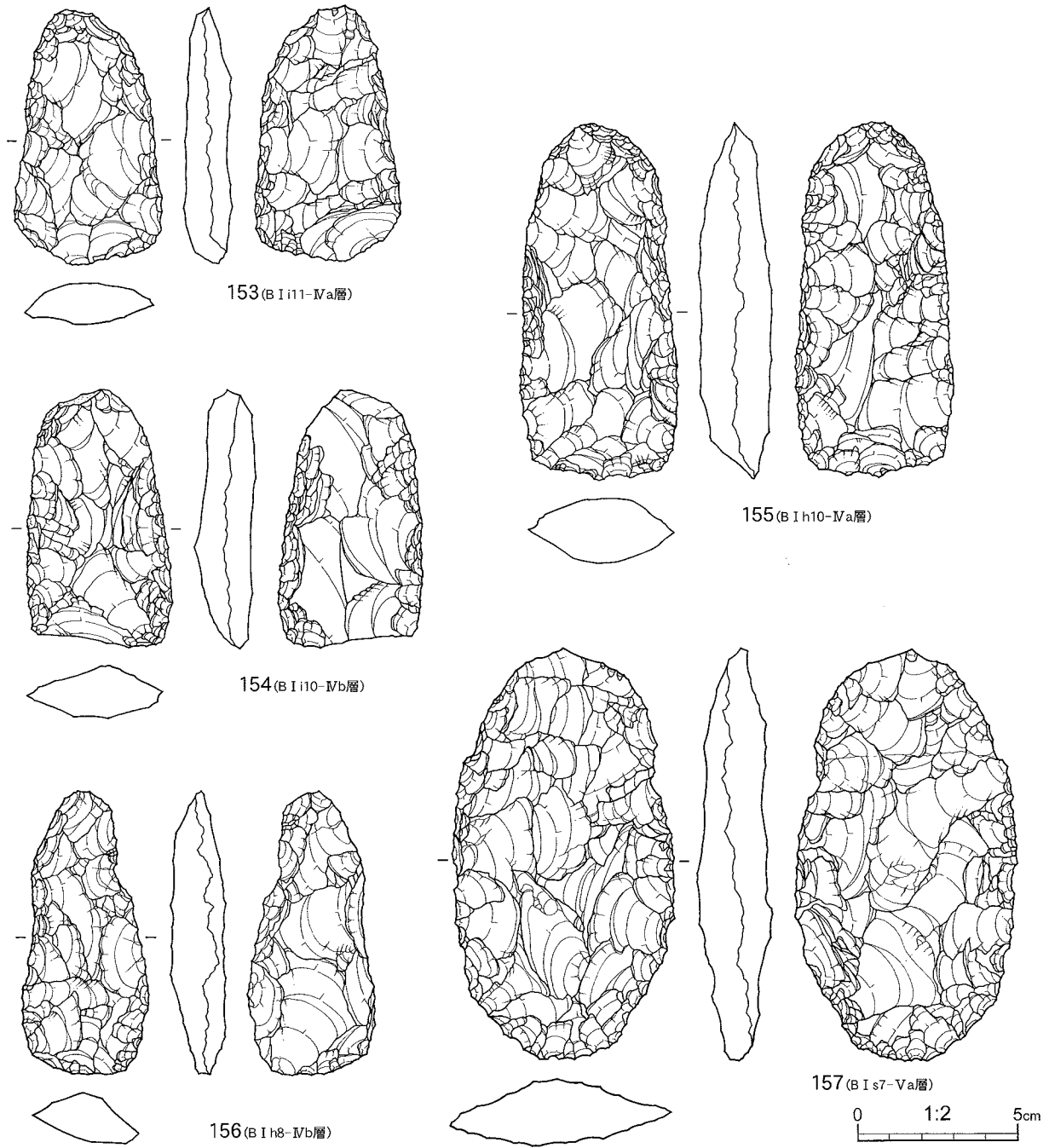
敲石・磨石 磨痕、敲打痕がある石器である。形状は棒状の長楕円形を呈するものが顕著である。磨痕と敲打痕の両方が認められるものが出土数が多い。石材は全て砂岩である。

凹 石 5点出土し、うち2点を図示した。209は砂岩、210は軽石を材料としている。

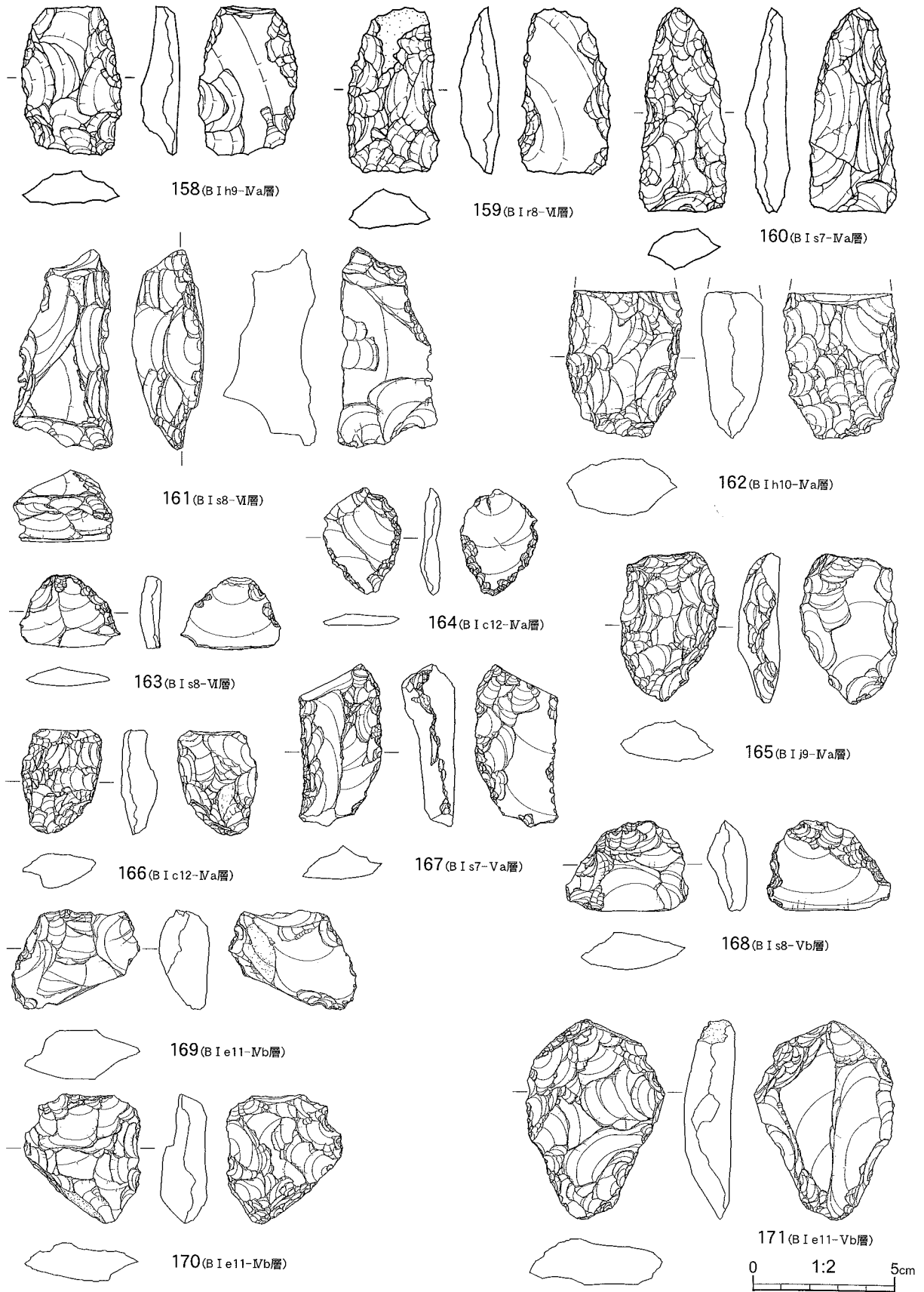
台石・石皿 9点出土し、うち3点を図示した。全て大きく欠損しており、遺存状態は良くない。石材には、砂岩を使用している。図示していないが、軽石を材料としているものも認められる。



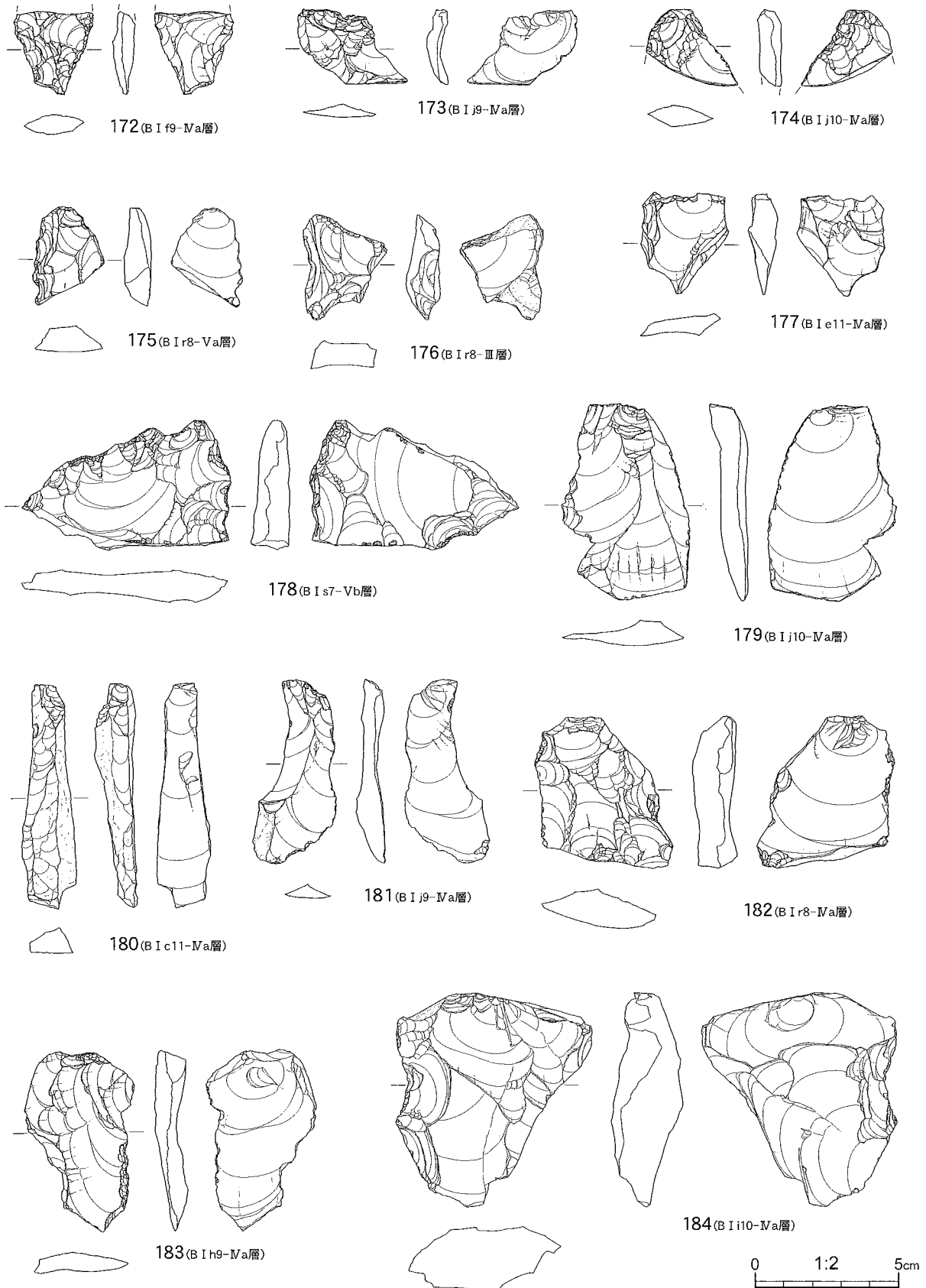
第24図 遺物包含層出土遺物(石器) I



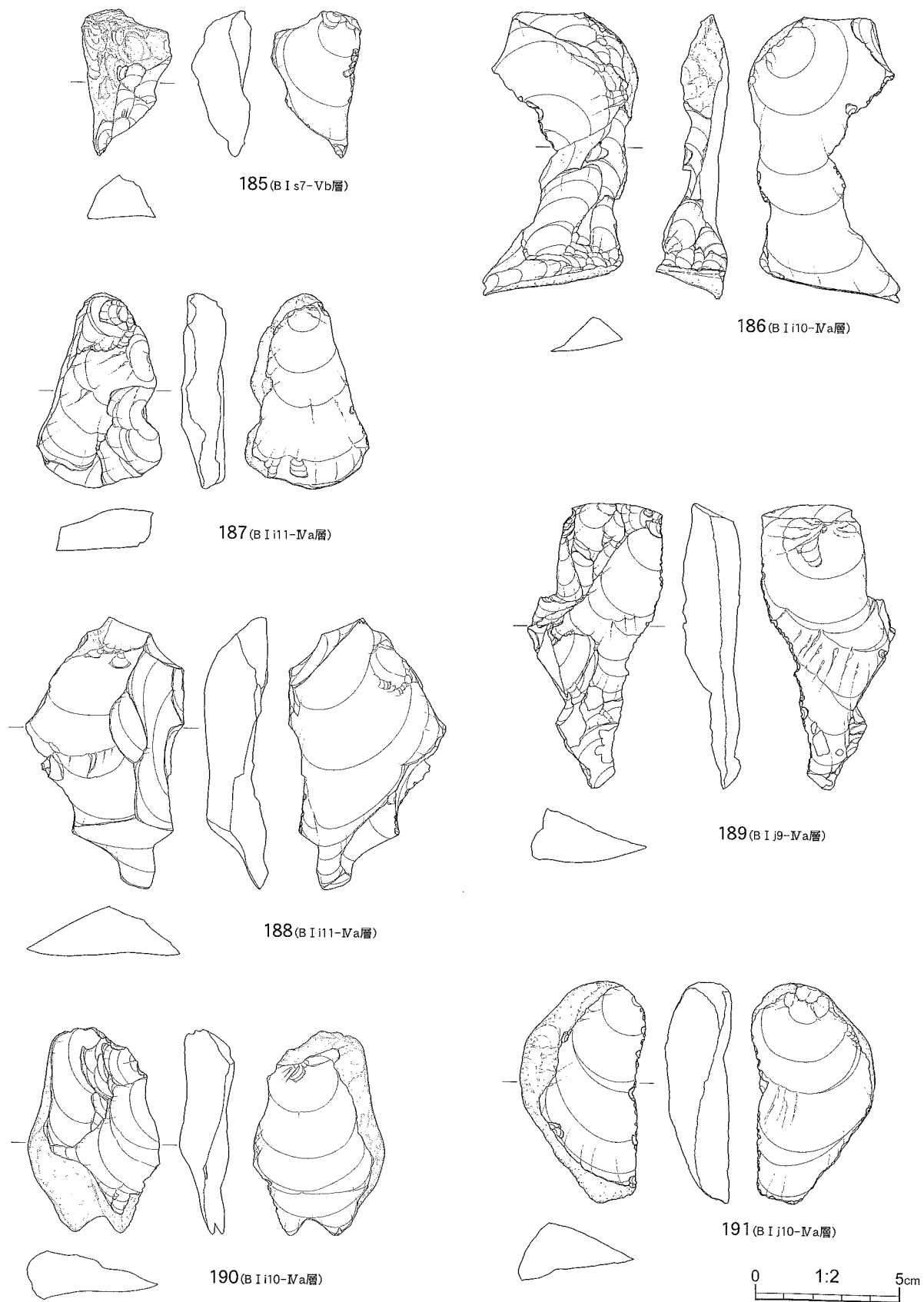
第25図 遺物包含層出土遺物（石器）Ⅱ



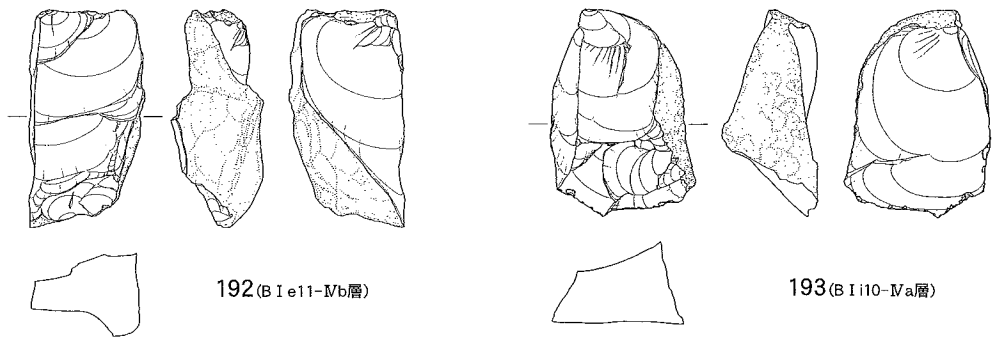
第26図 遺物包含層出土遺物（石器）Ⅲ



第27図 遺物包含層出土遺物（石器）Ⅳ

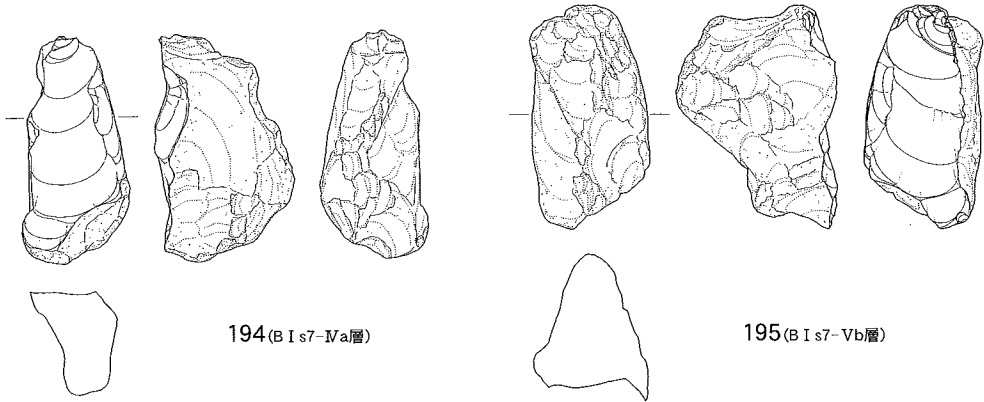


第28図 遺物包含層出土遺物（石器）V



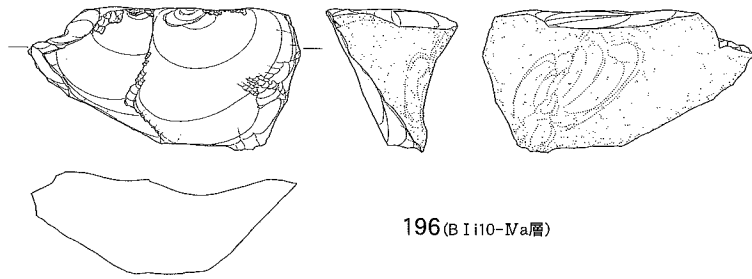
192(BIe11-Mb層)

193(BIi10-Ma層)

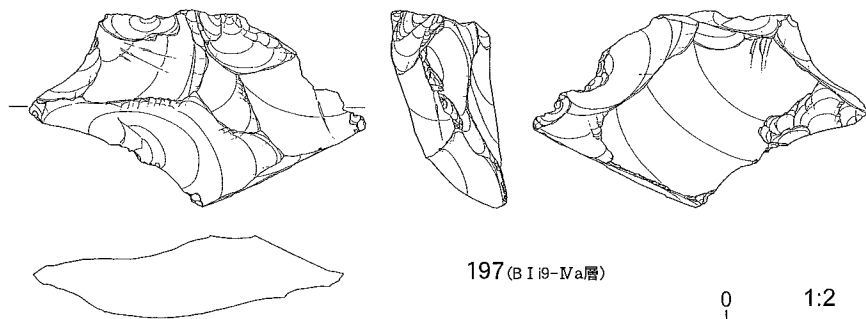


194(BIs7-Ma層)

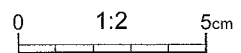
195(BIs7-Vb層)



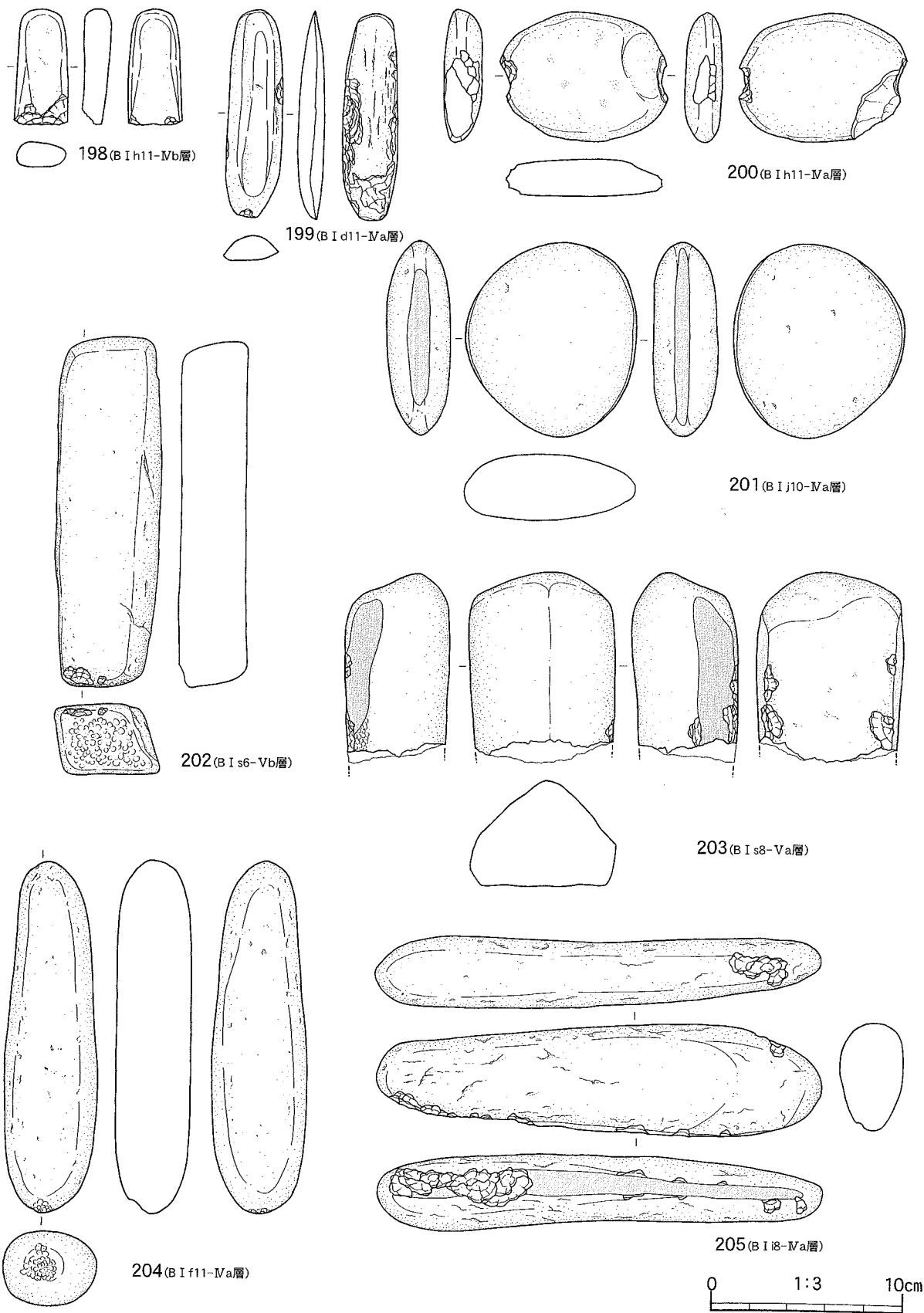
196(BIi10-Ma層)



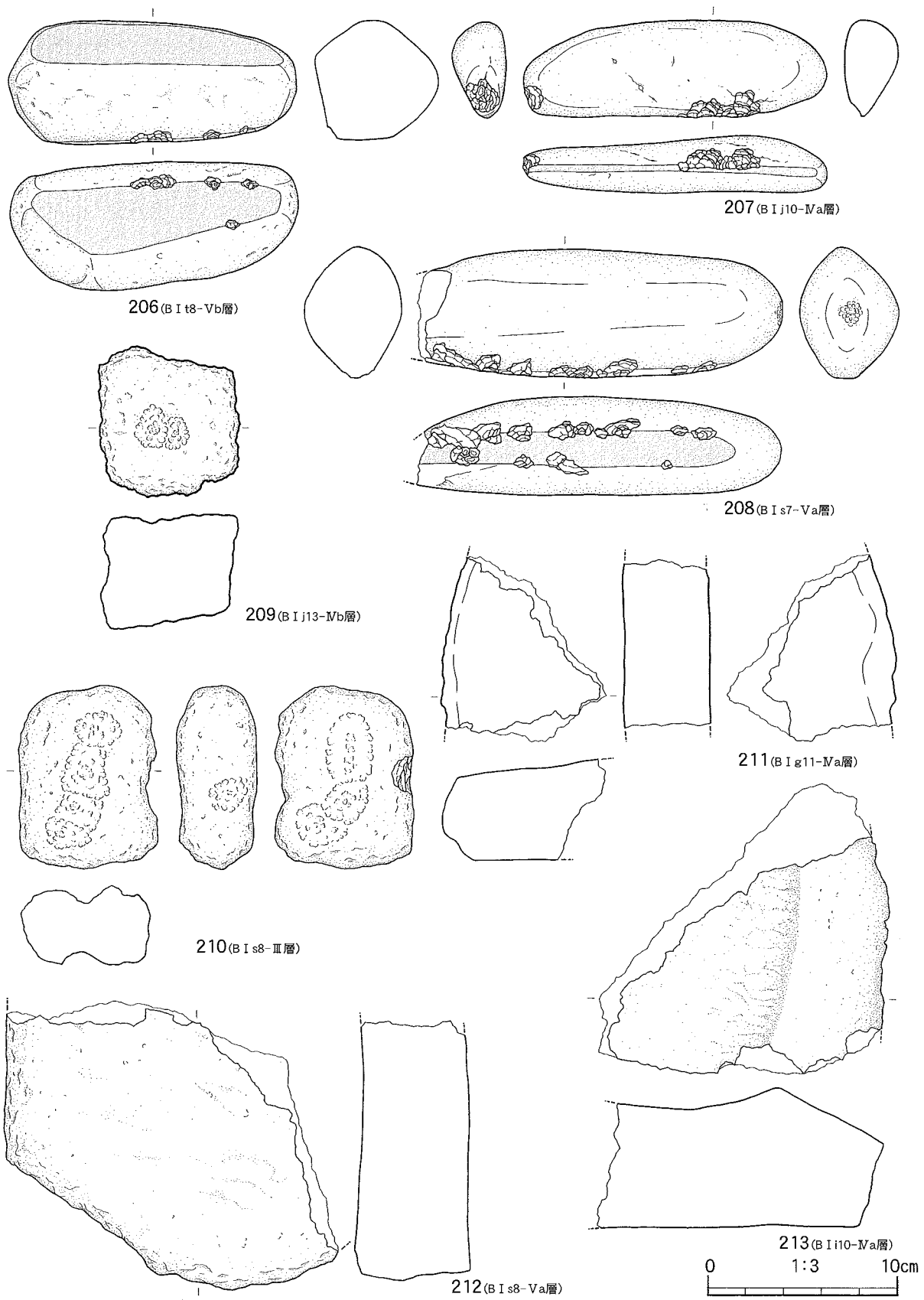
197(BIi9-Ma層)



第29図 遺物包含層出土遺物(石器)VI



第30図 遺物包含層出土遺物（石器）Ⅶ



第31図 遺物包含層出土遺物（石器）Ⅶ

3. まとめ

本調査の結果、竪穴住居跡2棟、土坑41基、ピット群、遺物包含層2箇所が確認された。

竪穴住居跡は、調査区域の南西部、尾根中位の平坦地から隣接して確認された。北側に所在するRA01は、不整隅丸方形を呈し、中央からやや西寄りの床面に地床炉を有する。出土土器は縄文早期から中期の土器片があるものの、住居跡の廃絶時期を明瞭に示す遺物は確認されていない。遺構検出面は、縄文早期の遺物包含層であるIV層上面で、本遺構内から出土した縄文早期の土器は、これが包含層からの流入と理解される。むしろ、前期以降の土器をもって本遺構の帰属時期を想定すべきである。

南側に位置するRA02は、不整隅丸方形を呈し、石囲炉が検出されている。出土遺物も多くはないが、北側床面から縄文時代中期後葉の深鉢が出土しており、これによる帰属時期の考察が可能である。

土坑は41基が確認された。うち6基は狭長の平面形を呈するもので、陥し穴と考えられる。長軸方向は、RD01及びRD20、RD03及びRD30、RD19及びRD31がそれぞれ近似する方向を示す点や、重複しあうRD19及びRD20の存在などを勘案すれば、必ずしも同時期に展開していたとは考え難い部分も存在する。本調査区域における当該遺構の検出数は少なく、その分布密度は小さいが、隣接地域の調査等により当該遺構数が増加すれば、詳細な分析が可能となろう。陥し穴以外の土坑で特徴的なのは、5基確認されたフラスコ形土坑である。いずれも壁が激しく崩落しており、原形を留めない。かかる土坑は調査区域南西部の平坦地から概ね検出されている。出土遺物は僅少であるが、縄文時代中期の土器が確認されており、当該時期或いはそれ以前の時期が想定されるものである。それ以外の土坑は、円形、楕円形、長楕円形の平面形態が認められるが、出土遺物に乏しく、遺構の時期及び性格については判然としない。

遺物は、縄文時代早期から晩期の土器、石器等が出土した。分けても出土量が多いのは、調査区域南西部において2箇所確認された遺物包含層である。

縄文時代早期の土器は、貝殻腹縁文の土器を主体としている。分けても顕著なのは、砲弾形の尖底から外傾して胴部が立ち上がり、僅かに外反する外削状の口縁部にいたる器形を呈している土器群である。文様は、器面全体に貝殻腹縁文が施文され、寺の沢式に相当する土器群である。かかる土器群は、主文様が貝殻腹縁文のみで構成されるものが主体であるが、刺突文や平行沈線と併せて文様帯を構成する例も散見される。かかる例は、前段階の白浜式等との関連性が想起されるもので、該期の古い段階に位置づけられる可能性がある。貝殻腹縁文土器は他に、沈線とともに幾何学文様を展開する物見台式に相当する一群も認められる。貝殻文以外の土器としては、条痕文を地文とし、爪形状の刺突文を有する白浜式に相当する土器や表裏縄文土器等も確認されており、本遺跡の様相が窺える資料である。

南西部包含層からは縄文前期の土器が多数確認されている。主体となるのは円筒下層式土器で、口縁部に横走る綾絡文を有する土器群をはじめ、網目状・木目状撚糸文、羽状縄文、頸部に隆帯が巡っているものなど、各期の土器が認められる。当該期の土器は、盛岡市玉山区北部や北接する岩手町などで認められるものであるが、旧盛岡市域における類例は乏しく、今後の検討材料となるものである。

本調査は、検出遺構は少ないものの、縄文早期から中期までの各期の遺物が確認されている。道路建設工事を調査起因となっているため調査区域が細長く、遺構数が少ない一因とも考えられる。谷底で確認された南西部包含層が、尾根上からの流入土によって形成されたと推測すれば、尾根上における集落の展開が推測される。本調査区の東側は丘陵部であるが、西側には、尾根中位の平坦地が広がっており、該地における集落の存在が想定されるものである。かかる区域における調査成果、類例の増加を待つて後考を期したい。

写真図版

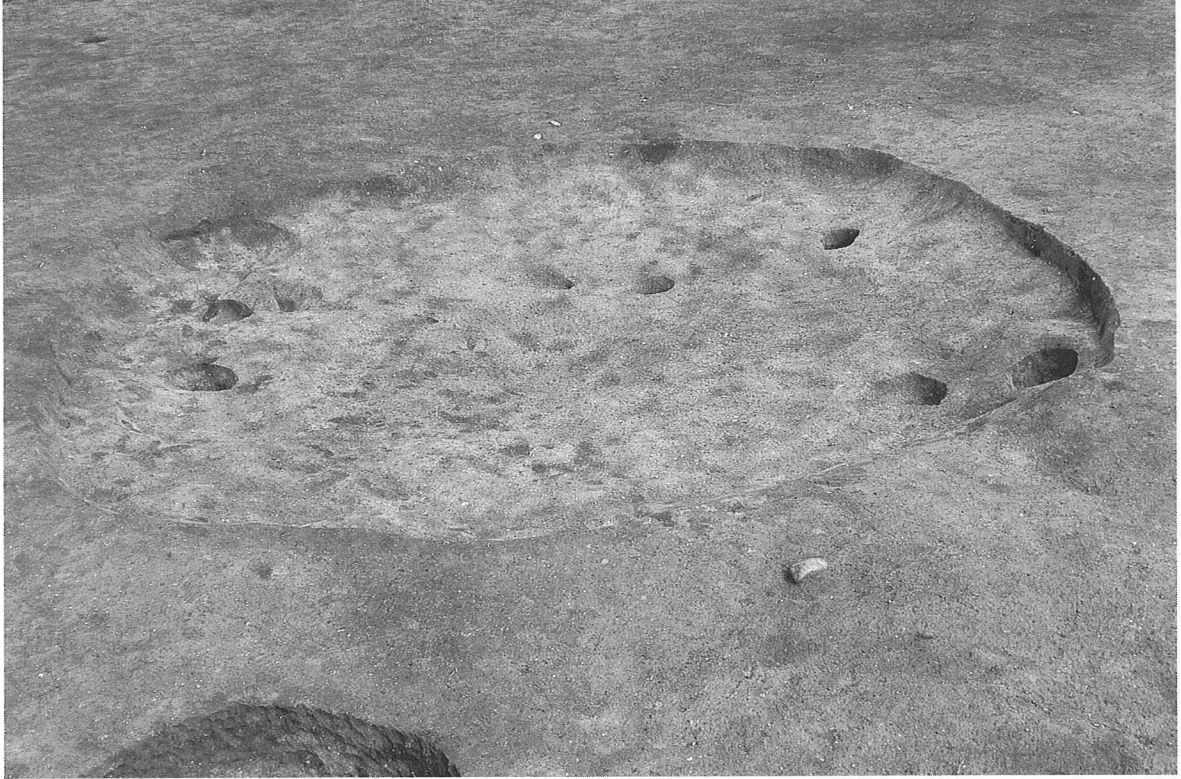


第1次調査区 全景

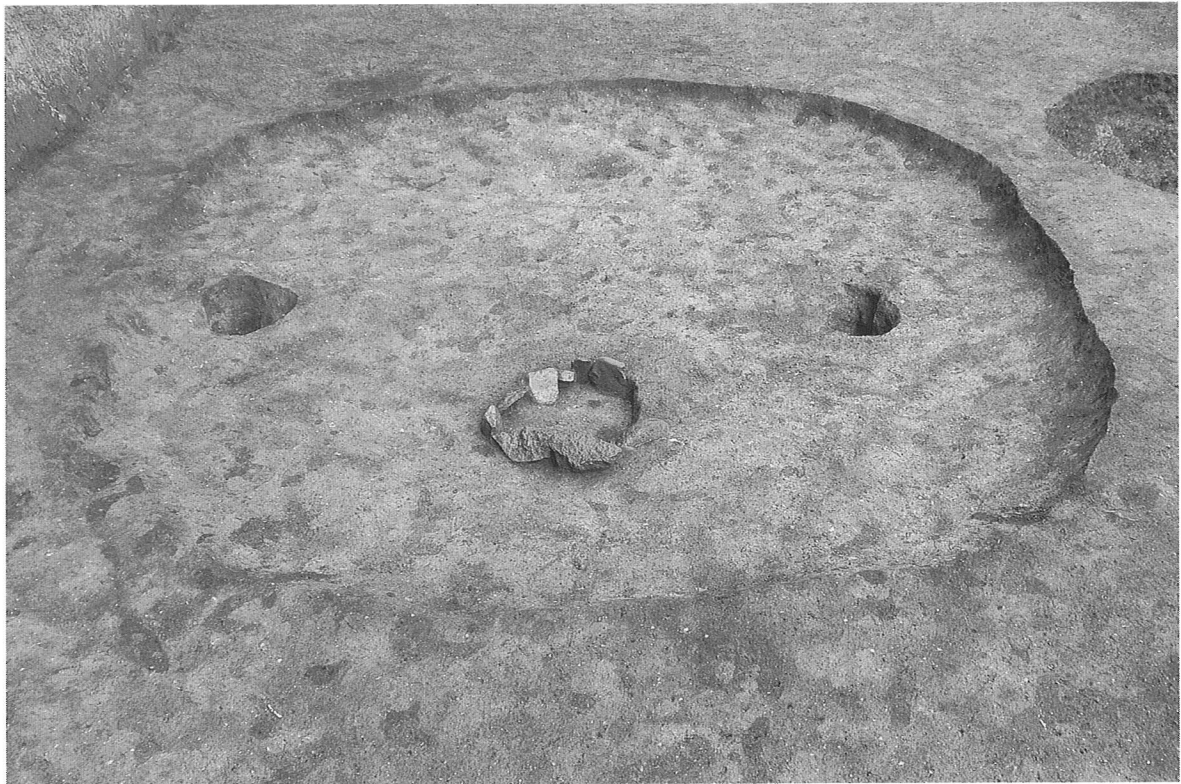


第2次調査区 全景

写真図版1 遺跡全体写真

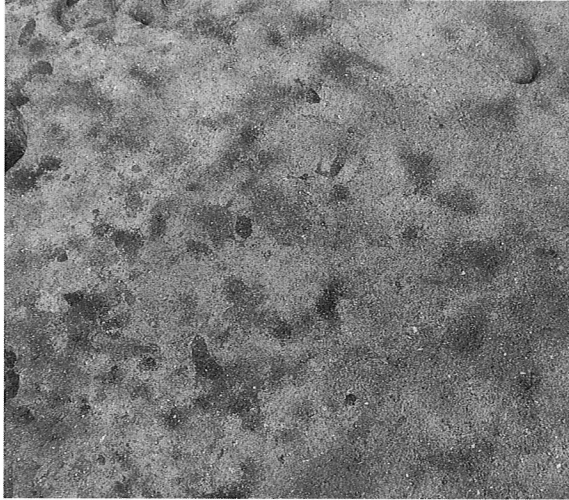


R A01住居跡 完掘全景



R A02住居跡 完掘全景

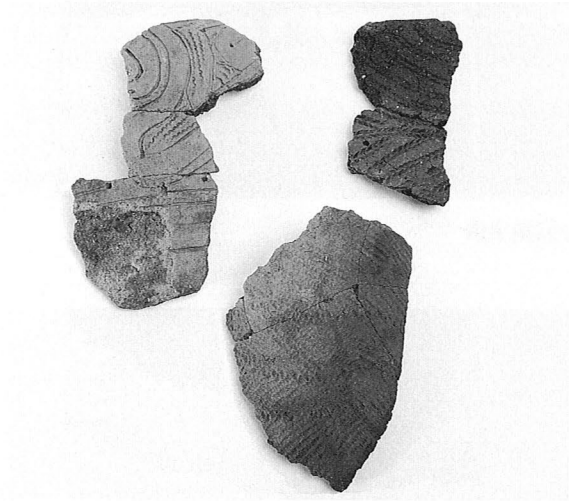
写真図版2 R A01・02住居跡 I



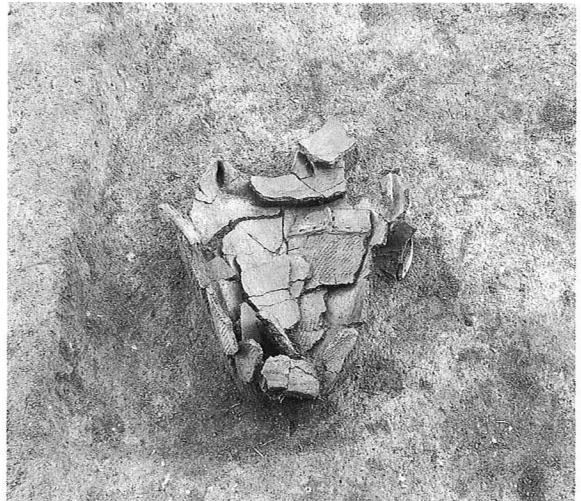
R A01住居跡 炉全景



R A02住居跡 炉全景



R A01住居跡 出土土器



R A02住居跡 土器出土状況

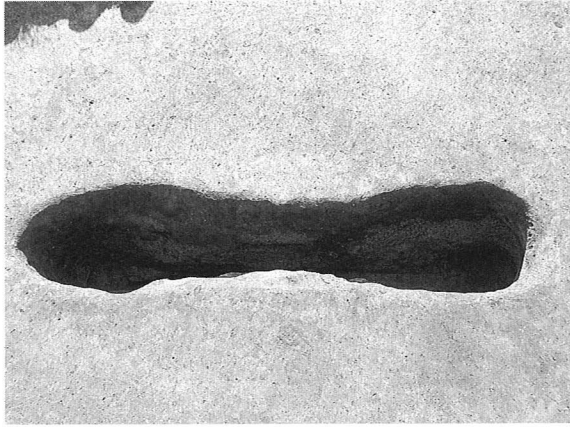


R A01住居跡 出土土器

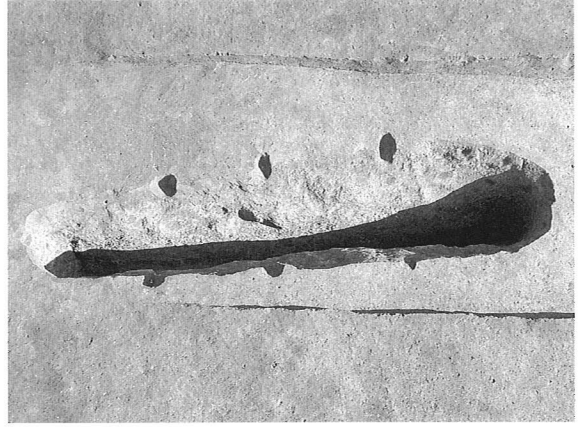


R A02住居跡 出土土器

写真図版3 R A01・02住居跡Ⅱ



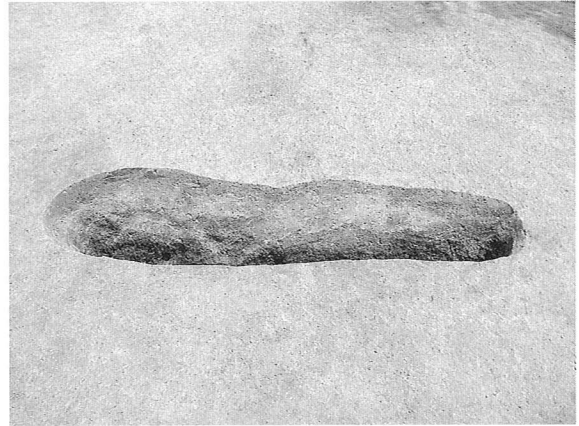
R D01土坑 完掘全景



R D03土坑 完掘全景



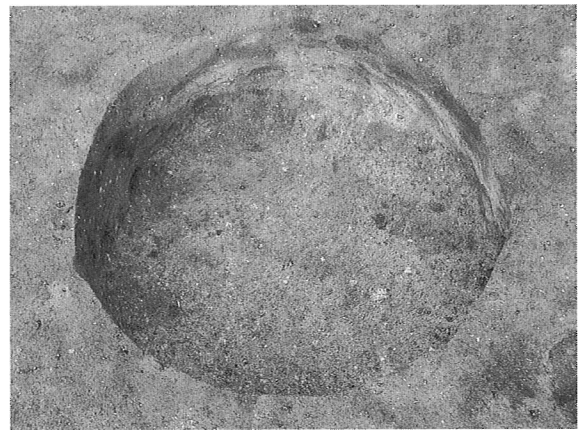
R D19・20土坑 完掘全景



R D30土坑 完掘全景



R D31土坑 完掘全景



R D07土坑 完掘全景

写真図版4 R D01・03・07・19・20・30・31土坑



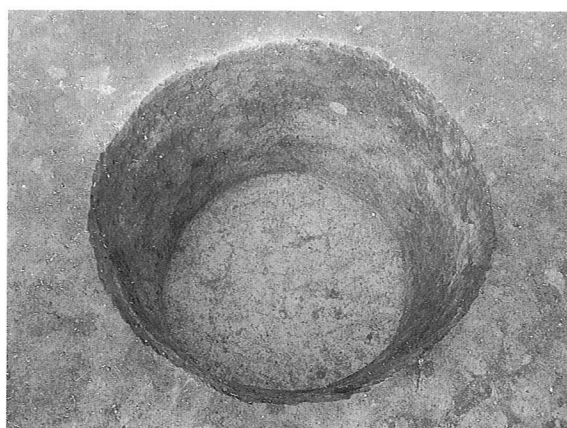
R D 32土坑 完掘全景



R D 33土坑 完掘全景



R D 34土坑 完掘全景



R D 35土坑 完掘全景

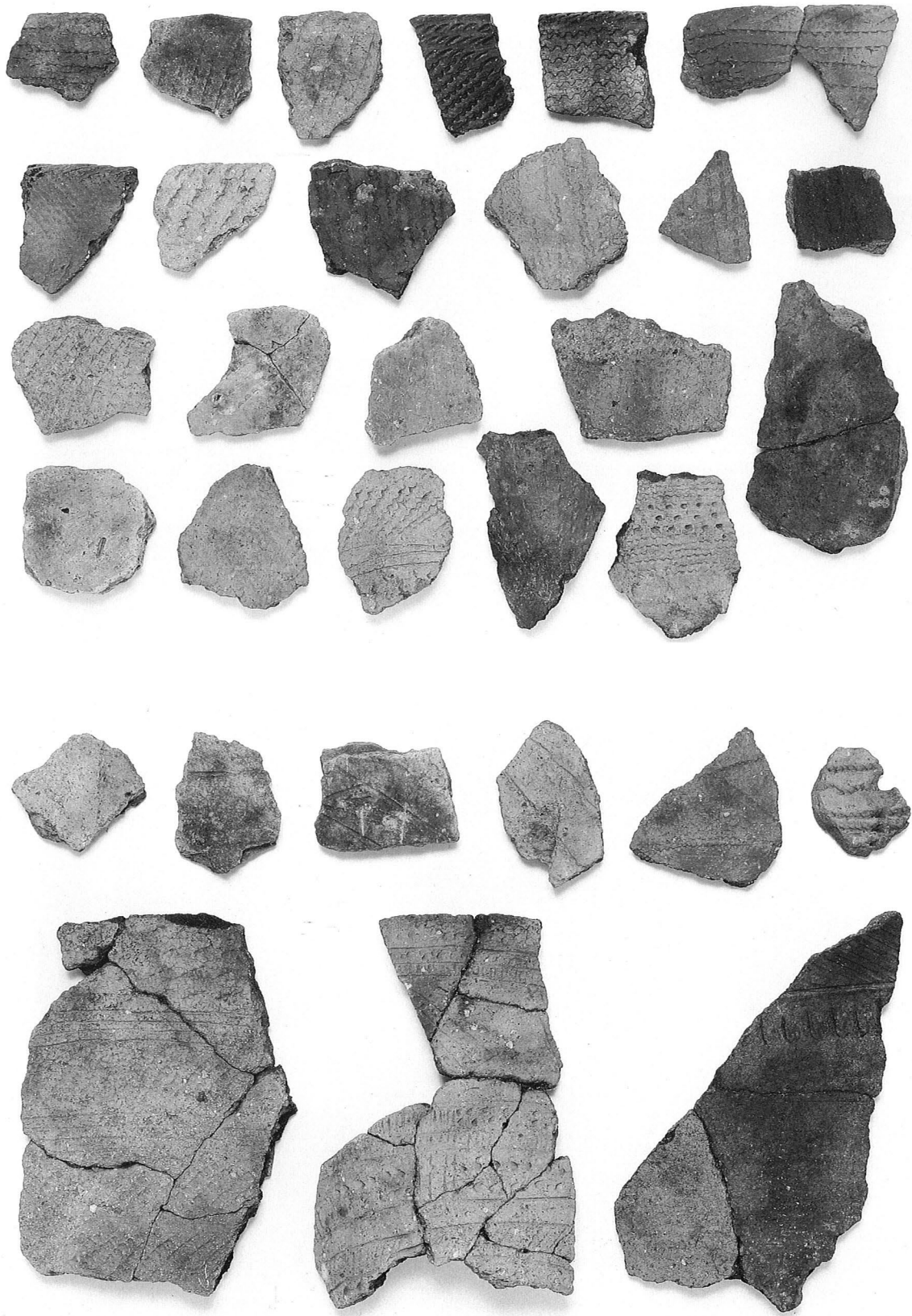


R D 37土坑 完掘全景

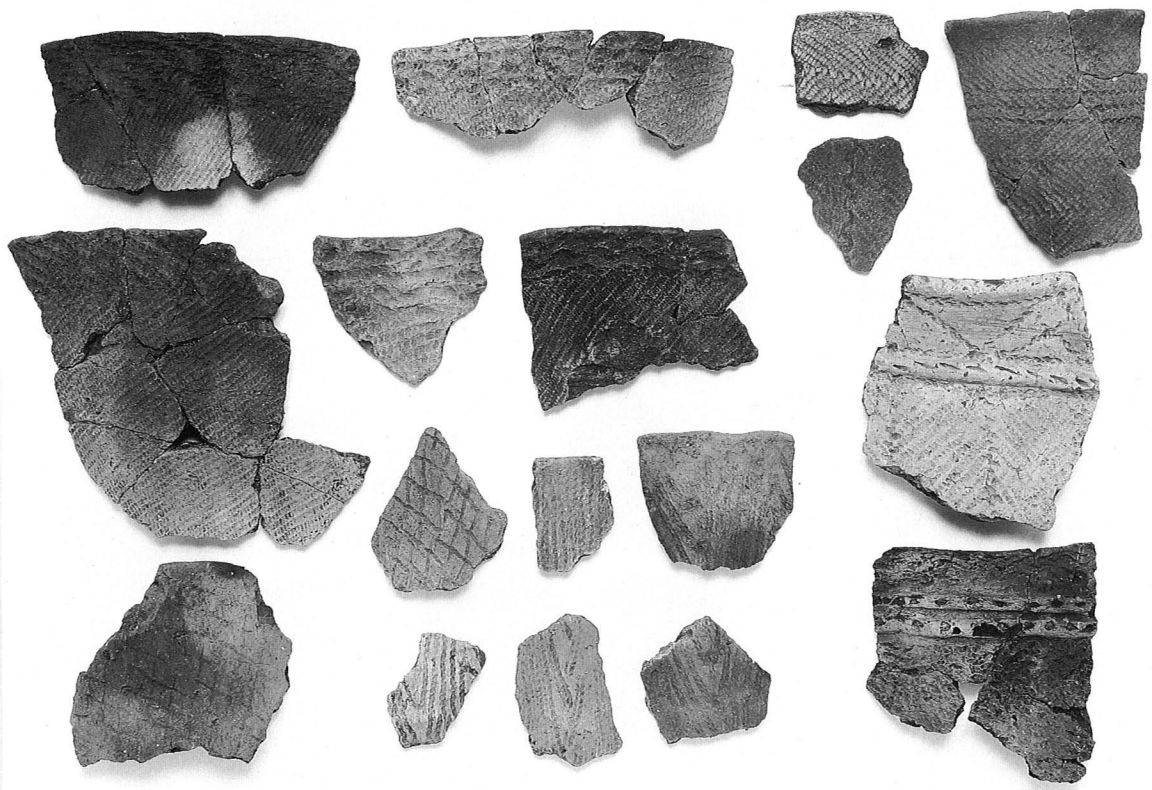


R D 40土坑 完掘全景

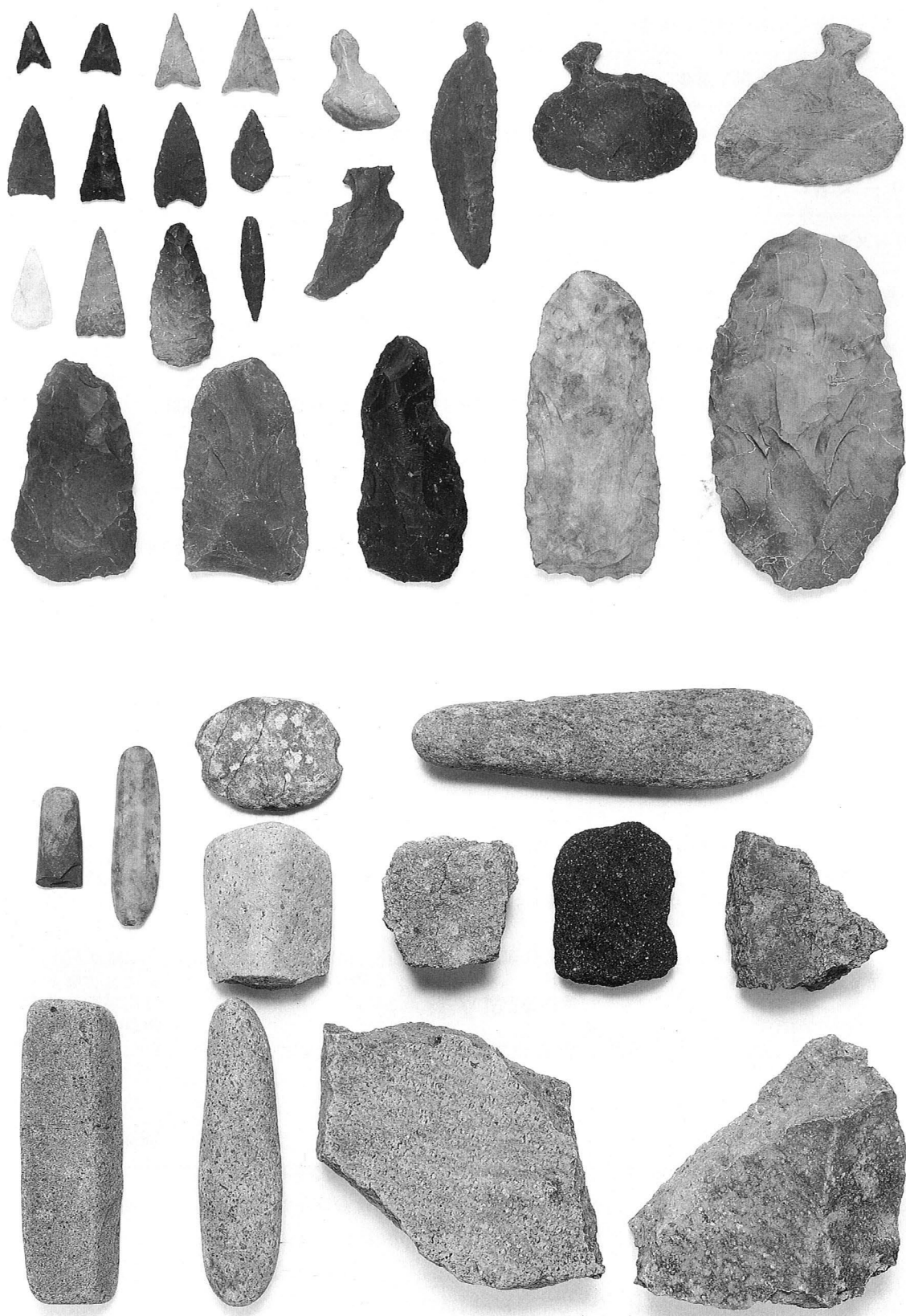
写真图版 5 R D 32 · 33 · 34 · 35 · 37 · 40土坑



写真图版 6 北西部包含層出土土器



写真図版7 南西部包含層出土土器



写真图版 8 遺物包含層出土石器

報告書抄録

ふりがな	ひるくほごいせき							
書名	昼久保V遺跡							
副書名	一般国道4号線渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	菊地 幸裕							
編集機関	岩手県 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13-1 TEL 019-635-6600							
発行年月日	2008年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひるくほごいせき 昼久保V遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 たまやまくいもだあざ 玉山区芋田字 ぶどうちない 武道地内	03201	KE78-2157	39° 51' 24"	141° 10' 41"	第1次調査 20050817 ∩ 20051121 第2次調査 20060711 ∩ 20061018	6,540㎡ 7,615㎡	一般国道4号 線渋民バイパ ス建設に伴う 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
昼久保V遺跡	散布地	縄文時代 早～晩期	竪穴住居跡 土坑 遺物包含層	2棟 41基	縄文早期～晩期の土器 石器(石鏃、石匙など)		縄文時代中期の竪穴 住居跡が検出。 遺物包含層から縄文 時代早期・前期の遺 物が多数出土。	

昼久保V遺跡

一般国道4号線渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査報告書

2008年3月28日 発行

編集 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 盛岡市本宮字荒屋13-1 TEL 019-635-6600

発行 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

〒020-0066 盛岡市上田4丁目2-2 TEL 019-624-3131

印刷 小松総合印刷株式会社

〒020-0827 盛岡市鉾屋町15-4 TEL 019-624-1374
